

# 海ノ民話学

## ジャーナル

創刊  
準備号



海ノ民話の  
価値を再発見し、  
新たな価値を  
創造するために。



Contributor

池ノ上真二  
飯倉義之  
石村智  
川島秀一  
後藤明  
久保華誉  
川村清志  
小坂典子  
佐藤千春  
堀成夫  
西谷榮治  
下田元毅  
美馬のゆり





日本財団と一般社団法人日本昔ばなし協会がともに推進する  
海ノ民話のまちプロジェクトは、  
「海との関わり」と「地域の学び」を、  
子どもたちに伝え語り継ぐことを目的としたプロジェクトです。

日本中に残された海にまつわる民話を発掘し、  
その民話のストーリーと、  
その民話に込められた「思い」「警鐘」「教訓」を、  
親しみやすいアニメーションにして、次の世代を担う子どもたちへ、  
そして、さらに未来へと語り継いでいきます。

プロジェクト開始の2018年から2025年3月までに  
92本の「海ノ民話アニメーション」を制作しました。  
これらのアニメは各地の資産として、観光やまちづくり、教育など、  
さまざまな分野で幅広く活用されています。



# 海は天国か地獄か 矛盾が生み出す魅力

池ノ上真一(北海道大学一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

## 今、改めて問い直す、海と人の関係

海は人類にとって豊かな恵みをもたらす一方で、時に甚大な被害をもたらす矛盾した存在である。東日本大震災や能登半島地震は、海が与える恩恵と脅威の両面を改めて浮き彫りにした。復旧・復興の過程では、単なるインフラ整備にとどまらず、地域文化や生活基盤の再構築が求められている。また、気候変動による海水温や潮流の変化は、漁業資源の分布に影響を及ぼし、日本近海でも漁獲種の変化が報告されている。この変化は経済のみならず、食文化や生活習慣にも波及し、海と人の関係そのものを揺るがしている。

そもそも、海は人類にとって畏怖の対象でありながら、生命の源でもある。太古の昔から、海は死と隣り合わせの存在として民話に刻まれてきたが、同時に生命の誕生の場であり、ミネラルの循環を通じて多様な生態系を育んできた。人々は、こうした二面性という矛盾を受け入れながら、海と密接に関わり続けてきたのである。しかし、近代化の進展とともに、海を資源として一方的に利用する姿勢が強まり、その結果として、乱獲や海洋汚染、さらには気候変動といった地球規模の問題が顕在化している。

こうした海と人の関係は、1つの普遍的な枠組みで捉えられるのではなく、多様な環境や歴史的背景のもと、それぞれの地域や文化に応じた価値観として形成されてきた。ドイツの「イツツ・ア・スモールワールド」のような単一の調和的な世界観ではなく、時に対立し、相互に影響を及ぼしながら変化していく、多層的で複雑な海洋文化が存在するのである。点から考察するものである。海と人の関係は、単なる資源の利用や経済活動にとどまらず、文化や価値観の形成にも深く関わっている。海の民話は、過去の人々が海とどのように向き合い、共存してきたのかを示す貴重な記録であり、そこには現代社会が直面する課題への示唆も含まれていると考える。

## 多様な学術領域から海ノ民話を捉える視座

本創刊準備号では、海ノ民話のまちプロジェクトがこれまでに取り組んできた日本各地の海ノ民話のアニメーション化やアーカイブ化が、どのような意味や価値を持つのか、また本プロジェクトが今後、日本や各地域、そして人々にどのように貢献できるのかを検討した。つまり、海の民話を先人から受け継いだ貴重な遺産と捉え、その意味や価値をいかに再発見するか、さらに、現代社会においてその意味や価値を創造するためのあり方や方法とは何かについて、民俗学・考古学・文化人類学・地域学・生物学・生態学・計画学・学習科学など様々な学問領域の専門家や実践家と共に探究し、以下のとおり大きくは2つの問いをもとに視座を提示した。

### 1. 海ノ民話を持つ意義や価値とは

現代では、海と人の関係が希薄化し、社会的背景や価値観の変化によつて海洋文化が継承されにくくなっている。産業の変化や都市化の進行により、海を生活の一部として捉える機会が減少し、伝統的な知識や価値観が次世代へと受け継がれにくくなっている。そんな状況を踏まえ、海ノ民話にはどんな視座から意義や価値を言及できるのか。

本ジャーナルでは、海ノ民話をもつ多様性という特徴、水平的世界観への気付き、海への畏敬の念、生業の継承の知恵、そして神話に見る海の位置づけや陸との関係、昔話を通じた学び、災害文化や伝統的生態学知識としての意義などについて、それぞれ専門的な観点から言及した。

### 2. 海ノ民話のまちプロジェクトはどんな貢献ができるか

海と共に生きる人々の歴史や文化は、民話を通じて次世代へ受け継がれてきた。しかし、現代社会では海への恐れや畏敬の念が薄れつつあり、その継承が課題となっている。本ジャーナルでは、過去の海難事故や海と人との関わりを学ぶ博物館展示、高校生を巻き込むことで、若い世代の視座を取り入れた新たな継承方法の検討、開拓された島における史実の

る。この視点を持つことで、海と人との関係が単なる「共存」や「利用」といった単純な構造ではなく、矛盾を孕みながらも進化し続ける動的な関係性であることが浮かび上がる。

本ジャーナルでは、自然科学・人文科学・社会科学の視点を交えながら、海の民話を題材とし、海洋文化の歴史と現状、そして未来について多角的に考察する。災害からの復興や気候変動による海洋環境の変化を踏まえつつ、海と人の関係性を持つ多様性とその意味を問い直し、持続可能な未来へ向けた新たな視座を見つけ出すことを目的とする。

## 海ノ民話のまちプロジェクト

本ジャーナルは「海ノ民話のまちプロジェクト」の一環としての取り組みである。「海ノ民話のまちプロジェクト」とは、一般社団法人日本昔ばなし協会が2018年に立ち上げたもので、「海とのつながり」と「地域の誇り」を次世代に伝え、語り継ぐことを目的としている。当該プロジェクトでは、日本各地に伝わる海にまつわる民話や伝承を選定し、それぞれのストーリーに込められた思いを「海ノ民話アニメーション」として表現している。これらのアニメーションは公式サイトやYouTubeチャンネルを通じて公開され、広く一般に親しまれることを目指している。また、民話が伝承されている地域を「海ノ民話のまち」として認定し、地域振興の一環としても活用されている。さらに、教育や観光など多様な場面で活用法が支援され、地域文化の継承に貢献している。

本ジャーナルは、この海ノ民話のまちプロジェクトの意義を学術的な視

民話化の可能性、海ノ民話アニメーションに関する国際認証制度の検討、現代の社会課題解決に繋がる民話の再解釈のあり方に言及した。

海ノ民話などのナラティブ(物語)を用いたアプローチは、海洋文化を現代の社会課題の解決において大変有効だと考えられる。論理的思考は収束的である一方で、ナラティブは発散的な思考を促し、多様な視点を提供すると言われている。海を「誰のものか」という問いを考える際も、ナラティブを用いることで、資源としての海洋利用、所有権や縄張り争い、文化の形成といった多面的な視座を持つことが可能となる。本ジャーナルで提示した視座は、その思考を発展させるきっかけとなることを期待する。

## 海ノ民話学の地平

海ノ民話は、単なる伝説や物語ではなく、人々が長い年月をかけて海と向き合い、共存する中で培ってきた知恵と経験の集積である。本号で掲載した論考を外観すると、その本質的な価値は、「恐れ」と「暮らしの継承」という2つの要素に象徴されるのではないか。これは、本稿冒頭で記述した人々に豊かな恵みをもたらす一方で、命を奪う厳しい存在という矛盾に通ずる。

現代社会では、グローバル化、気候変動、技術革新などの影響により、人と自然の関係が大きく変化している。特に、国際的な対立の激化や経済の変動が社会の不安定さを増し、持続可能な社会のあり方が問われている。このような時代において、地域社会の継承や価値創造の手がかりとして、海ノ民話を持つ海洋文化の暗黙知に再び注目する意義は大きい。

海ノ民話学は、海と人の関係を「海洋ビッグストーリー」の一環として捉える学問である。これは、宇宙の誕生から人類の歴史を俯瞰し、未来を考えるビッグストーリーの視点と共鳴する。海は生命の起源であり、人類の文明の発展に深く関わってきた。こうした流れの中で、海ノ民話は海との関わりを再考する貴重な手がかりとなる。私が20年前に経験した沖縄・竹富島の暮らしでは、離島ならではの「恐れ」と、それを乗り越えた「誇り」が共存していた。民話は、地域の歴史と人々の暮らしの痕跡を今に伝え、アイデンティティや誇りの醸成に寄与していた。本ジャーナルは、こうした視点を共有し、海ノ民話を基軸とした学問探究のための共創的なコミュニティ形成を目指す取り組みである。その志を同じくする人々と共に、新たな知見を生み出し、未来への道筋を模索していきたいと考えている。

# 海ノ民話学を捉ええる視点を

## 価値の再発見

日本の海の民話 その多様性

浦島太郎はアクアラングを背負って  
竜宮城に行ったのか？

船幽霊が語られるとき

海の神話

異郷への誘い — 日本の昔話における海 —

災害文化の共創に向けて — 海は与え、海は奪うとしても

伝統的生態学知識を保存継承する

海の民話とアニメーション化

民謡と民話のつながり — 文化を伝える歌と物語 —

## 新たな価値の創造

海への「おそれ」が芽生えるか!?

萩博物館「海の妖怪展」の挑戦

高校生たち、地域の民話から学ぶ

利尻島の歴史を民話に紡ぎ創る

災害民話がつくり出すまちづくり

— 海の民話と地域文脈 —

遺産学からみた海ノ民話のまちプロジェクトの意義

海ノ民話アニメーションはユネスコ「世界の記憶」に登録できるか?

民話の再解釈と多様性

文化的視点を取り入れた物語創造の意義

# 日本の海の民話 その多様性

飯倉義之 (國學院大學文学部)

キーワード 民話、想像力、生活実感、生業と環境、海の怪異、伝播者

## 民話と地域と生活と

日本には海を舞台とする多くの民話がある。しかし民話の中で語られる海は一概ではない。豊かな海、怖い海、不思議な海、信仰される海、仕事場としての海、特に注目されない海……この多様さはなぜ生まれたのだろうか。まずは民話のある特徴に

のである。

対して海村に生活し、海を生業の場とするのは、その目のうちに行って戻れる距離で操業する地付き(近海漁)の漁師や海女・海士たちである。彼ら彼女らの海の民話には、海がもたらす芳醇な恵みと、それと表裏一体の沖や海中の脅威とが語り込められている。

「船幽霊」の民話は、日本各地の漁師や船乗りには様々な形で伝えられている。特に漁師の語る「船幽霊」は、盆や大晦日ほか特定の日に漁に出ると、海で遭難した死者たちの乗る船に遭遇するというものだ。そうした船幽霊は生きた漁師を仲間にするべく「イナダ(柄杓)貸せ」などと声をかけてくる。この声を無視すれば船は沈み、またそれに応じて柄杓を貸すと、船幽霊が無数に増えた柄杓で船に海水を注ぎ入れやほり沈没してしまう。

伊勢の鳥羽・志摩地方の海女の伝承する「共潜き(トモカツキ)」もまた、海で死んだ海女が化したものだという。アワビを採りに海に潜ると自分と同じ姿形の海女がいて、アワビを渡してきたり、よく採れる場所を教えてきたりするが、その誘いに乗ると命を取られるという。

かつて筆者が話を聞かせてもらった漁師さんは「海の中はカネが泳いでいるようなもの。俺たちはそれを拾うだけ」と仰っていた。実にダイレクトな海の恵みへの感謝の言葉だ。と同時に、その恵みを「拾う」には常に

注目したい。

民話は空想的ではあるけれども、空想の産物ではない。まるで謎かけといった文章になつてしまったが、実はこれは民話の重要な特徴である。民話においては動物が当たり前にことばを話し、人が簡単に生き返り、無尽蔵に富を生む宝物があり、鬼や化け物が出現するなど、現実世界では起こり得ない出来事が語られるという点では空想的である。しかしその空想も、現実世界の生活に根差した空想なのだ。

朝日新聞2024年6月17日付夕刊のコラム「ふらつとラボ」に、国立遺伝学研究所の柴崎祥太特任研究員(数理生物学)らの研究グループの研究結果が紹介されている。柴崎氏らは民話のデータベースから16種類の動物を選び、民話の伝承地域と動物の生息域を比較したところ、その8割以上が一致するという結果が得られたという。

データを基に数量を示したという点でこの研究には大いに意義があるが、実は「民話に出てくる動物たちはその地域に生息する動物である」という見解は、民話研究においては以前から自明のことであった。人間の想像力はじつは無限ではなく、生活の中で見聞きしたことを基に展開する「注1」。したがって空想的な民話においても、見たことも聞いたこともないものは語られ得ないのだ。だから民話は常に身近な動物たちが登場し、富は大判小判や米俵や反物など、お決まりの物品で表わされるのである。民話は語り手と聞き手の生活を反映して作り上げられていると言つてよい。海の民話の多様性も、海と人との関係の多様性の反映なのである。

危険が伴う。何かを間違えれば、海の恵みを拾う代わりにわが命を落としてしまうかもしれない。鳥羽・志摩のトモカツキが「自分そっくり」と語られるのを思い出していた。船幽霊もトモカツキも、海で命を落とした漁師であり海女海士とされる。偶然やタイムミングによつては、死者となつていたのは自分かも知れない。「あの死者はわたし」なのだ。海を生業の場とした人たちの伝えた民話は、大きな富をもたらしてくれる海に生き、生かされつつも、いつその海に殺されるかも知れない、という緊張感がその根底にあるといえる。

## 海を行き来する人たち

さらに土地を離れて遠距離に行く海の生活者がいる。カツオやカジキなど特定の魚を追いかける遠洋漁師や、港を廻つて物資を運ぶ船乗りが伝えた海の民話である。自宅に帰る機会が少なく、船上や港で日々を過ごしたこうした職業の人たちは広い世間の見聞を持つており、民話や民謡を広める役割を果たした。こうした人たちは伝播者と呼ばれる。

「猫と南瓜」という民話がある。ある男が宿で、猫が戸棚を開けて魚を盗むのを見まわす。翌年、男が同じ宿を訪ねると、時期外れのかぼちゃの煮物が出る。庭に勝手に生えたかぼちゃだと聞いて怪しんでかぼ

## 海辺に生きる人、海に生きる人

具体的な例を見てみよう。海辺に暮らす人々と海に暮らす人々とはイコールではない。海辺を生活の場としながらも、陸地での農業等を生業とする人々には、実は漁業を生業とする人々以上に多かった。そうした陸に暮らす人々が伝えた海の民話は、日々利用する浜や磯を舞台としている。「蛸の足の八本目」という民話などはその典型だ。

ある老婆が磯に貝拾い(海藻摘み)に行くとき、大きな蛸が岩場で居眠りをしている。老婆はこっそり蛸の足を一本切り取って帰って食べた。翌日、磯に行くときまた蛸がいたのでまた足を切つて帰って食べた。それから毎日一本ずつ足を切つては食べて8日目、蛸の最後の足を切ろうと近寄ると、蛸はすばやく老婆に足を巻き付けて、そのまま海に潜つて行つてしまった。欲張りな身を止まそうとはこのこと、という話である。足を食べると老婆ではなく猫だとする話や、8日目に老婆(猫)が警戒していると蛸が手招き(足招き?)するので「その手は食わん」と答えるなど、笑話化していたりする例もある。

この話からは、陸の者にとつて浜や磯の産物が、海から来る恵みとしてとらえられていることがうかがえる。と同時に、慣れた浜や磯でも油断があれば命を失いかねない場所だとして、その危険さが意識されていることもわかる。陸に生きる者にとつて海は、富の源泉であると同時に、陸とは別のルールが支配する原則立ち入り禁止の異界な

ちやの根を掘つてみるとなんと殺した猫の骨から生えており、そのかぼちゃは毒だった。猫の怨念恐ろしや、という話である。この話の主人公が、海沿いでは船頭、内陸部では葉売りとなつている例が多いのである。船頭や葉売りがこの話を広めたであろうことが推測できる。中には聞いた話ではなく、「これはこの俺の身に起きたことなんだが……」と、体験談を装つて、話の登場人物に成り代わつて語ることもあったに違いない。海路を縦横無尽に行き来した人々には、外界から新規で珍奇な民話をもたらす役目が期待されていたのである。

このように生きる地域や職業によつて、海の見え方も海との関係もそれぞれ異なる。そうしたそれぞれの生活の体験から民話が生まれ、語り継がれていく。海の民話の多様性からは、人と海とが多様な関わり合いをもつていたことが見えてくるのである。

【注1】体験や知識から生活を超えた空想を生み出せる人々も存在する。それは詩人(芸能者)であり、また宗教者である。そうした想像力から生まれた民話も存在する。

## むかしむかし 浦島は 助けた亀に 連れられて 竜宮城へ 来てみれば 絵にも描けない 美しさ

誰もが知る『浦島太郎』の昔話のことを歌った童謡である。この一説を読んだだけで、多くの人は海の中にある竜宮城の光景を思い浮かべることが出来るのではないだろうか。

しかしここで少し待つてほしい。浦島太郎は生身の人間である。海の中でどのように呼吸をしていたのだろうか？

昔話なのでこのような野暮な理屈をこねてはいけないのは重々承知している。しかしこのことは、日本人が海というものに対してどのような観念を持っていたのかを反映している好例ではないかと、私は考えている。

そもそも『浦島太郎』において海の中の竜宮城に行くというモチーフは当初から存在していたのだろうか？ この昔話の原型になったと考えられているのは古代の『丹後国風土記』逸文に所収された物語で、その中では、漁師がウミガメに化けていた仙女と出会い、彼女の故郷である島「蓬山」を船で訪れるという話となっている。つまりここでは海の中の世界という話にはなっていない。

中世の『御伽草子』に所収された物語になると、「竜宮城」や「玉手箱」といった『浦島太郎』の昔話の基本的な要素が出そろった。しかしこの物語でも竜宮城は海の中ではなく

く海の向こうの陸地であるように描かれている。

では竜宮城が海の中にあるという描写はどのようにして出てきたのであろうか？ 近世になると、浦島太郎がウミガメの背に乗って竜宮城へ向かうというイメージが絵草子に描かれるようになって一般化したようであるが、相変わらず竜宮城は海の上にあるように描かれることが多かった。そして大正時代の絵本でようやく、昭和時代の教科書ではつきりと海の中の竜宮城の様子が描写されたことから、今日の竜宮城のイメージが完成されたようである。

しかし海の中に桃源郷があるという観念は、必ずしも新しい時代のものとは言えない。古代の『古事記』『日本書紀』の「山幸彦と海幸彦」の神話では、釣針をなくした山幸彦が、それを探す過程で海神である綿津見神の宮殿へとたどり着く。このあたりは『浦島太郎』の昔話とストーリーの構造が似ている。

この綿津見神という神であるが、神話の中では伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）の間に生まれたことになっている。伊邪那岐命が黄泉国を支配していた国津神たちを屈服させるという、いわゆる天孫降臨の物語である。すなわち天と地という垂直的な世界観が強調された物語である。こうした全体の世界観に合わせる形で、海神の神話も変化を余儀なくされたのかもしれない。

しかし別の考え方もある。海を生活の場とする人々にとっても、海の世界を垂直的に分割する別な論理があったのではないだろうか？ このことを解くカギは「地球は丸い」という事実である。

海の人々にとって、海のはるか向こうに存在する島の存在は、肉眼では見ることが出来ない。なぜならそれは地球が丸いからであり、水平線の向こうにある島は、文字通り水平線の下に落ちこちてしまっているのだから。そして船で航海して島に近付くにつれて、最初はその島の高いところが水平線の上に姿を見せ、さらに近付くにつれて、その姿を徐々に見せ始めるのである。その様子は、あたかも島が水平線の下から浮かび上がってくるように感じられることだろう。

このように海の人々にとっては、海の向こうの遠い島は水平線より下にあるという、垂直的な世界観も共有されていたのかもしれない。つまり彼らにとって、水平的世界観（遠—中—近）と垂直的世界観（深—中—浅）は置換可能な観念であったのかもしれないのだ。

最後に以上のことを踏まえて、本論のタイトルの問いに解答することとしたい。浦島太郎はアクアラングなど持っていないから、彼はウミガメの背に乗って、水平線の下にある竜宮城へとたどり着いたのである。

このように、海神が海の世界を垂直方向に分割して統治しているという神話のイメージは古代より存在したようだ。こうした垂直的な世界観は、高天原が天にあり、黄泉国が地下にあるという観念とも対応しているようだ。そのため、竜宮城という異世界が海の中にあるというイメージが醸成されていったのだろう。『浦島太郎』の昔話においても、乙姫はしばしば綿津見神の娘とみなされることから、そのイメージが重ねられたのかもしれない。

ところで日本の神話では海神は三神によつて成るといふパターンが一般的なのが、宗像三女神もその例にもれない。宗像三女神は田心姫神（タゴリヒメノカミ）、湍津姫神（タギツヒメノカミ）、市杵島姫神（イチキシマヒメノカミ）から成り、それぞれ沖ノ島にある奥津宮、大島にある中津宮、九州本島にある辺津宮に座すとされている。なお世界遺産に登録されている『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群はこの宗像三女神の祀られる場所を含んでいる。

を支配していた国津神たちを屈服させるという、いわゆる天孫降臨の物語である。すなわち天と地という垂直的な世界観が強調された物語である。こうした全体の世界観に合わせる形で、海神の神話も変化を余儀なくされたのかもしれない。

しかし別の考え方もある。海を生活の場とする人々にとっても、海の世界を垂直的に分割する別な論理があったのではないだろうか？ このことを解くカギは「地球は丸い」という事実である。

海の人々にとって、海のはるか向こうに存在する島の存在は、肉眼では見ることが出来ない。なぜならそれは地球が丸いからであり、水平線の向こうにある島は、文字通り水平線の下に落ちこちてしまっているのだから。そして船で航海して島に近付くにつれて、最初はその島の高いところが水平線の上に姿を見せ、さらに近付くにつれて、その姿を徐々に見せ始めるのである。その様子は、あたかも島が水平線の下から浮かび上がってくるように感じられることだろう。

このように海の人々にとっては、海の向こうの遠い島は水平線より下にあるという、垂直的な世界観も共有されていたのかもしれない。つまり彼らにとって、水平的世界観（遠—中—近）と垂直的世界観（深—中—浅）は置換可能な観念であったのかもしれないのだ。

最後に以上のことを踏まえて、本論のタイトルの問いに解答することとしたい。浦島太郎はアクアラングなど持っていないから、彼はウミガメの背に乗って、水平線の下にある竜宮城へとたどり着いたのである。

### 価値の再発見②

# 浦島太郎は アクアラングを背負って 竜宮城に行ったのか？

石村 智 (国立文化財機構 東京文化財研究所)

キーワード

浦島太郎、竜宮城、海神、海上他界観、垂直的世界観、水平的世界観

# 船幽霊が語られるとき

川島秀一（東北大学災害科学国際研究所）

キーワード 船幽霊、カシキ、オフナマダ、海難、世界

「船幽霊」という世間話は、とくに漁村でモーレンセン（亡霊船）とか、ボウコンセン（亡魂船）と呼ばれるもので、ほんやりした明かりだけのものもあるが、基本的に船の形をした幽霊で、海上で見える怪異の一つであり、海難者の霊だと語られている。

船幽霊の出現時は季節や天候を選ばず、春先の霧のかかった時分や雨の降る夜、雪が降って四方が真っ白に見えるときなどに現れることが多いが、風の強い日もある。元日や盆の15日などの船を出してはいけない日に沖へ行ったために出くわしたという例も多い。全国的によく語られる話の型は、船幽霊が現れるとヒシヤクを貸せと願われるが、そのまま貸すとそれを貸して水船にされるので、必ずヒシヤクの底を抜いて貸すものだという話である。これらの船幽霊の話が実際にどのような機会を捉えて話されるのか、漁業という生活のなかから考えてみたい。

宮城県気仙沼市唐桑町小長根の佐々木利男さん（大正7年生まれ）は、少年の頃、カツオ船のカシキ（炊事係）を勤めていたときに、一緒に乗船していたトモ（船尾）のオヤンツアマから、「沖でボウコン（亡魂）に遭ったとき、もしボウコンからツルベ（釣瓶・図1）を貸せと言われたら、底を抜いて貸すものだ。エナガ（柄杓・図2）を貸せと言われたら、カエツチャ（逆さ）にして貸してやれよ」と教えられたものだという。カシキは他の船乗りが起きない前に米をといだり、茶碗を洗ったりするが、そのように一人でいるときにボウコンや不審な漁火が見えることがあるという。しかも、ツルベやエナガは、カシキがよく使用する道具であり、これら



図1 ツルベ（今はバケツを用いる）

の道具を用いて、ボウコンなどが船に水を入れたりすることを、漁師たちが非常に恐れたのである。そのために、カシキは神妙な面持ちで甲板の上に膝を付き、オヤンツアマから船幽霊の話聞いたのである。

カツオ船のオヤンツアマとは、役職名であり、トモ（船尾）にいて、カシキなどの初めてカツオ船に乗った14、15歳の少年に、カツオ漁の技術というよりは、海や漁に対する心構えを指導する年配者であり、多くは船頭（漁労長）経験を終えた者たちである。彼らは、カシキに単なる具体的な教訓を与えるというだけでなく、逆に恐怖心を植え付け、それを克服していく冷静な心を養うことにも心がけてきたものと思われる。一人前の漁師になるには、夜の海に対する恐怖心を拭い去っていくことが必要だからである。

このオヤンツアマとカシキとの関わりを由は、カシキは朝・昼夜と日に三度、船のオフナマダという神様にも、ご飯を上げているからだという。

カシキだけが夜の海や仲間の子の異常を感じることができたのだが、大島の遭難の話でも、オヤンツアマと、一人助かったカシキだけが、仲間の異常を知っていたわけである。他界に行こうとする老人と、他界から出てきたばかりの子どもには、他界の情報も感得できる力があると思われるものだろう。このような力を養成するためにも、オヤンツアマはカシキに、船幽霊などの他界の物の怪が関わる話を伝えようとしたのである。どちらかというと、廻船やカツオ船などの沖船で船幽霊が伝えられることが多いのも、より人知の及ばぬ他界に近いところを操船しているからである。

考えさせるような、もう一つの船幽霊の話がある。この場合は、船幽霊を見たとか出会ったという話ではなく、「ボウコンに船が憑かれた」と語られる噂話になった事実である。気仙沼市浅根の村上吉一さん（大正4年生まれ）によると、明治の頃、大島（気仙沼市）にいた15歳の少年（カシキ）が冬の鰯船に乗り組み、海難に遭遇し、ただ一人だけ助かったときの話である。吹雪のなか、大島の出港地の入り口まで戻ってきたものの、突然、乗組員全員がボウコンに憑かれ、船を押すのを止めて、海から水を船の中に汲み始めたという。一人だけ冷静だったのが舵をとるオヤンツアマで、着た少年を懐に抱きながら死んでいったという。その子だけが生き残って、この話を伝えたものと思われる。



図2 エナガ（柄杓）

ところで、船幽霊の話にツルベ・エナガ・アカカイなどの、海水を汲む容器の漁具が出てくるのは何故だろうか。柳田国男は「杓子・柄杓及び瓢箪」（1919）のなかで、船幽霊の対処方法の例として、「尾州（愛知県）知多郡の海上などでは「あやかし」（船幽霊）を鎮めるには柄杓を多く投ずればよいと言ふ話はあつて、別に其杓の底を抜くとは見えぬ」と述べ、本来は柄杓を供するのは「魂の宿り」であつたと述べている。つまり、船幽霊の魂を柄杓の中に閉じ込めるために海に投じたのが本来のねらいであつたという。宮城県の気仙沼地方で、逆にアカカイのいない船には乗るなど言われているのも、それがアカカイを求める幽霊船であるというのではなく、その漁具を持つていることが、船幽霊に遭遇したときなどに役立つからであつたと思われる。

それが、死者が真水を求めて飲むための道具として柄杓が考えられ、ひいては、アカカイを出すはずのアカカイが、異常な心理状況のなかでは、それで海水を船に汲み入れたらするという経験譚が加えられ、そのような水を入れる容器である柄杓やアカカイやツルベなどを船幽霊から求められたときには、底を抜いて渡すということが語られ始めたものと思われる。

いずれにせよ、「船幽霊」の話は単なる民話でも教訓話でもない。それは、漁業という海に向かわざるを得なかった生業の中から生じた話であり、他界も含めた、人知の知ることのできない海のいのちや怖れに対して、謙虚になって感じとれる能力のもった人びとによって伝えられた話の数々であったからである。



図3 アカカイ



図4 盆月の始まりの日に団子を船から投げる（新島、2006.8.1）

の島山平作さん（明治36年生まれ）は、次のように話してくださいました。時代（暴風雨）のときは、アカカイ（船内にたまった水をかき出す漁具・図3）を用いて、船に入った水を外へ出しながら帰航したのだが、あまりの疲労に、どちらが船の中か外か分からなくなり、海水を船に入れる者があつたという。そのような者を「モーレンに憑かれた」と語り、お施餓鬼に上げた団子をかませ、海に吐き出させると正気に戻ったという。このような仲間を観察した者たちが、モーレンには、底を抜いたアカカイを渡すものと語り始めたのかもしれないと平作さんは語る。ここで、モーレンに与えられたと思われる団子とは、海難者に与えられる供物のことである。伊豆七島の新島で、盆月が始まる8月1日に、漁船から団子を海に供えるの

## 海の誕生

海は人類にとって原初的な体験であることは、最古の文明とされるスメール人が、内陸民であるのに最初に存在したのが海であると語ることからうかがえる。大地の神エングキを生んだのが原初大海を表すナムム女神であった。スメールに続くアツカド人の神話では淡水のアプスと海の塩水ティアマトが交わって神々が生まれるとする。海が大地に絶えず生命の根源を与えるとされるのだ。

生命の根源の海の観念はインドの乳海攪拌の神話にも見いだせる。インドラ神とアスラ神群との争いに端を発してヴィシュヌ神が乳海に甘露をまぜて、そこから月や牝牛、あるいは神々はさまざまな動物、鉱物、あるいは道具が生まれるのである。この海を攪拌する様は日本神話のイザナキ・イザナミが陸のない海をアマノスボコでかき混ぜると、そのしたたりから最初のオノゴロ島が出来ると対比される。海は生命発生の根源であり、同時に太陽からのエネルギーを地球上に拡散させ、まさに生命維持するための「ブルーエンジン」だったからである(チェルスキ、2024)。

海の謎は塩辛いことであり、その理由が海は死んだ神の血あるいは汗から生まれたという観念がある。北欧神話のエッダではポリネシアのマオリ神話にはよく似た、天地の神であり天地分離型神話で語られるランギとババがいる。日本神話の天神イザナキと地母神イザナミが火の神カグツチを産んだとき女神が死んだとするのが天地分離であるという説もある。オーケアノスは万物の起源、世界を取り巻く海(水)の象徴であり、大地はその中に浮いていたとされるが、浮かぶ島という概念はユーラシア大陸の北部、さらに東シナ海沿岸(琉球、朝鮮、中国東部)に分布し、ポリネシア、そして日本列島の民話にもその痕跡が見られる。

## 海は宇宙、宇宙は海

ポリネシア人のような海洋バイオニアにとって天理分離あるいは「低い天の押し上げ」モチーフは天と水平線が合一する海の彼方に向かって航海をする民のイメージを表現したものだ(後藤、2009)。彼らは視界の外にある遠い島を目指し、風向、うねり、鳥、天体などさまざまな自然現象をたよりに目的地にたどり着いた。その中でも出現・没入時の星座の角度はもともと重要な要素、スターナビゲーションであった。彼らの天体に関する神話は単なる物語ではなく、航海術という実践的な知識と密接な関係をもっていた。ポリネシアでは「島を釣り上げる」という神話がある。島の天頂を通る星を頼りに航海すると次第にその



### 価値の再発見④

# 海の神話

後藤 明 (南山大学人類学研究所)

キーワード 創世神話、海の起源、外来王、航海術、津波、天文学

原古の巨人が殺されその死体の各部分から世界ができたとき、海は血液から生まれた。ニューギニアのアラベシユでは女がサトウキビの葉で指を切ったので穴を掘って血をためたが、あふれて海となった。ポリネシアのソサエティ諸島では創世の神タンガロアは鳥

星は高くなり、やがて水平線に島が現れる。まるで星が島を釣り上げたように見えるのである。

ポリネシアの天文航海術では水平線の決まった場所から登る星座は方位の指標であった。彼らはその位置をポリネシア語でアナ(「穴の意味」と表現した。さらにタヒチ語では星座はルア(「筒」)を通して東西を移動すると考えた。そして次々と指標になる星が南中したときの高さで自分のいる南北の位置(緯度)を推測した。北半球なら北極星、南半球でも南中したとき天の真南を向く南十字星の高さも緯度によって異なるので移動の指標とした(後藤、2024a・2025)。

そのような航海術を伝えるタヒチには星座どうしが交合して星を生み、その星が空を航海してまた別の星を妻として子供を産むという星生み神話がある。星生み神話ではまず男性原理と女性原理を表す神が交わって、太陽や月あるいは流星のような天体を生んでいく。生まれた星の一つが天空を航海して別の星と交わり、さらに星を生んでいく。すなわち星の運行が航海の鏡像であったのだ。カヌーとされるのは金星や火星であるが、このような惑星は決まった位置関係をもった星座の間をあたかもカヌーのように「航海」する。大海原を、星を頼りに航海してきたポリネシア人たちは、星は空に写った海や島であると認識し

を造るのにあまり熱心だったので汗が地面のくぼみに溜まって海になった。また隣のマルケサス諸島では男神と交わってさまざまなものを生んだ女神は最後に破水して流れ出した羊水が海となった(大林、1993；後藤2010、2017)。

## 天地分離

ギリシャ・ヘシオドスの『神統記』では最初に発生したのがカオス(混沌ないし無限)であり、それから広い胸を持つガイア(大地♀)ができた。カオスとガイアからはいろいろな神が誕生したが、ガイアは星をちりばめたウーラノス(天空)を生み、ウーラノス(♂)に体を覆わせた。ガイアはまたウーラノスと交わって深く渦巻く海であるオーケアノスなどを産んだ。オーケアノスが「海」オーシヤン」の語源となる。

ガイアとウーラノスは強く抱擁し神々を産んでいったが、息子のひとりクロノスが鎌で上にのしかかる父ウーラノスの男根を切断し放り投げた。こうして天と地は分離した(天地分離型神話)。クロノスは支配的神となったがクロノス自身もやがて息子のゼウスに位を奪われてしまう。切断されたウーラノスの男根は泡立つ海に投げ込まれると潮に流され、白い泡が群がってその中から生まれたのが女神アフロディーテであり、ローマ神話ではウェヌス(ヴィーナス)となる。

たのはむしろ自然であった。

## おわりに

ポリネシアにはプロトウあるいはハワイキといった根源の国の概念が広がる。それらは神がすむ国、祖先が来た場所、実りが到来する場所であると同時に、魂が戻っていく国でもある。南島語族世界(東南アジア島嶼部からオセアニア)では棺が船型あるいはカヌーを棺として使うことが多いが、魂がハワイキのような来世に行く場合もしばしば海を越えて航海していく(後藤、2024b)。

このように人類にとって海は異界であり、また世界刷新(例 津波による破滅)の契機でもある(後藤、2000)。そしてしばしば英雄は海を越えてやってくる(外来王の思想)。ポリネシアでは航海英雄が暗い世界から明るい世界に乗り出し、発見した島や地形に命名してゆく。これは神武の東遷の過程で事細かに地名を列挙していくさまを思い出させる。大和王権が畿内では正当性を主張するなら、最初から畿内に天神降臨すればよいのに、なぜわざわざ日向から海を越え、陸行して土着勢力を屈服させるのか? 移動しながら土地を命名し、土着勢力を屈服させていくことは未開の地を分節し、秩序立てていく行為であるからだ(後藤、2012)。



# 異郷への誘い

## —日本の昔話における海—

久保華誉 (学習院大学/武蔵野大学)

キーワード 海、異郷、日本の昔話、口承文芸

る男が海に(内陸では川と語る場合もある)正月迎えの門松、もしくは薪などを投じる。すると、竜宮から使い(乙姫など)がやってきて、お礼に竜宮に連れて行く。そこで富をもたらす者(鼻たれ小僧など)、もしくは動物(金を産む亀、鶏、犬や猫など)、宝物(打出の小槌、動物の言葉が分かる聞耳頭巾など)を貰う。家に帰った男は、決まりを守って富を得て幸せになる。ここで終わらず、他の家族や、隣の爺、本人のおこった心によって、富を得られなくなったりすることも多い。この話では、陸に住む私たちと異なる別の世界、不思議な海の力が語られている。漁に出かけ海の幸を貰うように、昔話でも、海に出かけて富を得るのが分かる。しかし、真似をして欲を出したり、感謝を忘れたりして、その富は得られなくなってしまう。現代に生きる我々も身につまされる話である。

### おなじみの「浦島太郎」

つぎの「浦島太郎」は、海の昔話と言えは真つ先に思い浮かぶ話ではないだろうか。尋常小学校唱歌の「昔々 浦島は 助けた亀に連れられて 龍宮城へ 来てみれば 絵にもかけない 美しさ」を懐かしく思い浮かべる方も多いただろう。このあと太郎は、乙姫様の歓待を受けて竜宮城の暮らしを楽しむが、帰郷を望み、お土産に玉手箱を渡される。少しの間で帰ったと思つたのに、故郷では歳月は流れ、家族も知り合いも亡くなつてしまつていた。絶望のあまり、開けてはいけませんと言われた箱を開けた太郎は白髪のおじいさんになつてしまつたと語られる。京都府や神奈川県など各地で事物と結びつ

### 異郷譚

昔話の中でも、海は重要な役割を持つている。日本の昔話の中で海にまつわる話をいくつか紹介したい。まず日本の昔話の各話を分類し整理した『日本昔話大成』(全12巻、角川書店)のなかで関敬吾は、「異郷」の標目を掲げた。この「異郷」で、「海底の世界と関係する昔話をわずかにあげた」として、海を舞台とした話を、「竜宮童子」、「浦島太郎」、「玉取姫」の3話あげている(関、1978)。

### 海からの使い「竜宮童子」

まず「竜宮童子」は、こんな話である。あ

く伝説でもある。明治時代の児童文学作家、巖谷小波は、子どもにいじめられている亀を助けたのが発端という「亀の恩返し」を強調し、それも定着した。8世紀ころには成立したと考えられる『丹後国風土記』の浦島太郎では、天女に見初められ、亀に変わった竜宮ではなく海の彼方の島に行くことになっている。それが室町時代のお伽草子では、海中の竜宮に変わつてゆく(市古、1986)。またお伽草子では釣られた亀が女になり、太郎と夫婦になつているため、人間以外と結婚する話、異類婚姻譚でもある。海という「異郷」で「異類」と結ばれるという、「異」の要素も強いのが分かる。

### 命をかける海女「玉取姫」

「玉取姫」は九州や四国で数話語られる程度で、いままでの2話と比べると圧倒的に採話例が少ない。とは言え、香川県志度寺の縁起にもなり、謡曲「海人」として能の演目にもなつている。藤原不比等が、妹から送られた宝珠を海から現れた手に奪われ、取り戻すために身をやつして海女と結ばれる。海女は命と引き換えに龍神から珠を取り戻し、その息子の房前が寺を建てて弔つたという。この話でも、海に龍神という人知を超える存在が住んでいて、龍神と対峙する人間の姿が描かれる。

### 想像を超える「大島と蝦」

また笑い話に分類される昔話では、「大島と蝦」(関、1979)という話がある。大島が、自分ほど大きいものはいないと海を

渡つていると、棒が突き出たのでそこで休む。そして一日飛び続けまた棒があったので、止まると棒が動き出し「私は大蝦だがお前は一日中、私のひげで何をしている?」と言う。大島は自分の思い上がりを恥じるが、蝦は自分はそのなにかいのかと海を行く。すると洞穴があつたのでそこで休み、また一日行くと、同じような洞穴があるのでそこで休もうとすると、それは大きな亀の鼻の穴で、くしゃみをした亀に飛ばされて、蝦は腰が曲がつてしまったそう。こうした想像を超えた大きさの海の生き物たちは、海のスケールの大きさや不可思議さを語っているのだろう。やはり海は陸地との境を隔てた「異郷」なのだ。

### 海は物語の宝庫

こうした異なる世界との境界は、民俗学を考へる際にも非常に重要だ。たとえば、時間の境目もあるが、身近な場所の境目としては、居住する共同体の内と外、道が交差する四辻、川を隔てて向こう岸とをつなぐ橋など。伝説でも、渡辺綱が美しい女に化けた鬼に出会ふのは橋であるし、幽霊になつた女が生まれたばかりの赤ん坊のために船を買いに来たという船家(京都府…)みなどや幽霊子育船本舗)があるのも六道の辻である。

このように古くから口伝えされてきた口承文芸の中で、2つの異なる世界と接する境は、不安定であるがゆえに、怪異がおき、さまざまなドラマが語られる。「異郷」である海は、人にはなくてはならない物語の宝庫なのだ。

現代における災害文化の共創、について考えてみたい。災害文化とは災害をなくするための文化ではない。誰もが薄々気づいていることだが、災害を完全に防ぐことは不可能である。災害文化とは、いつやってくるのかわからないが、いつかは必ずやってくる災害と折り合いをつけ、過去の教訓をもとにその備えを怠らず、日々の生活をよりよく生きるための術を見いだすことに他ならない。

2011年の東日本大震災の後、政治家や研究者、マスメディアによって「想定外」という言葉が使われた。地震の規模、津波の到達時間、浸水域、全てが想定外であった。それらを教訓として政府や自治体は、「強靱化」という言葉を呪文のように繰り返し、大規模な地域の改変を押し進めた。その象徴的な存在が、三陸の海岸部に敷設され、海と人を隔絶した防潮堤である。東日本大震災当時の津波の遡上高に合わせ、それらの防潮堤は築かれた。国民の生命と財産を守る、という大義名分のもとに、海とともに暮らす地元の人たちの不安や懸念の声はかき消されていった。

しかし、2024年の能登半島地震では、何が起きただろうか。確かに奥能登の一部では、津波の被害を被った地域もある。しかし、日本海に面する半島の外浦では、津波よりも海岸部の想像を絶する隆起が顕著だった。多くの港が干上がり、使用できなくなった。震災後も、海での生業の再開の目処は立っていない。隆起の被害は人々の日常生活を根底から覆ってしまった。言うまでもないが、海の隆起に防潮堤は何の意味もなさない。特定の災害に対して「強靱化」

を試みても、災害は異なった形で生活を脅かす。

では私たちは、災害への備えを諦めて、やがてくる災害を甘んじて受けるしかないのだろうか。もちろん、そんなことはない。人は必ずいつか死ぬ、という事実を前にして、生きることを諦める人間がいないのと同じである。むしろ人はいつか死ぬからこそ、生きていく現在の意味を問ひかけ、自らが望む生活を希求している。同じように災害を否定したり、距離を置くのではなく、災害と向かい合い、折り合いをつけ、その危険性を軽減する術を日々の生活のなかで育んでいかねばならない。

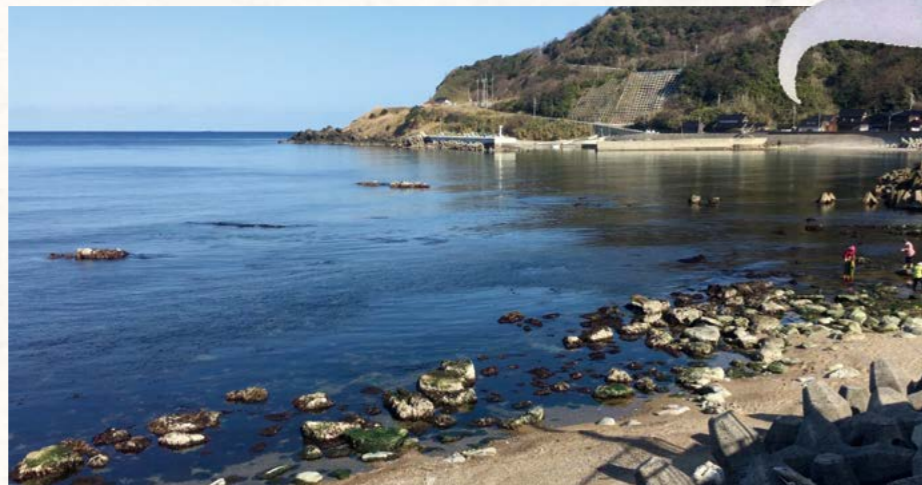
そもそも強靱化と訳されたレジリエンスは、弾性や柔軟性、しなやかさという意味で使われている。私たちはレジリエンスの本来的意味に立ち返るべきかもしれない。災害からは逃れられないが、それらを柔軟に受け止め、被害を軽減するための知識と技術を共有していく必要がある。例えば、災害を記憶する術は、先人たちの営みから見出すことができる。津波の浸水域に記念碑を設けて子孫に警鐘を残したり、記念碑に刻まれた文面を残すための年中行事の事例などが、日本各地から報告されている。

災害で失われた命に対して、地域の人々は各々の生活のなかで体得した鎮魂の作法を身につけていた。東北地方に残る昭和の大津波の記念碑は、当時のマスメディアの援助で作られ、教訓と警告が前面に記されていた。しかし、それ以前の記念碑には、失われた命を記憶し、彼らの死を共同体として受け止め、後世に伝えようとする思いが刻まれている。このような鎮魂の作法は、阪神

淡路大震災やそれ以後の災害の後に作られたモニュメントにも受け継がれている。また、伝統的な社会では死者の供養や鎮魂に際して、民間の宗教的職能者が大きな役割を果たしていた。彼らは死者を代弁し、残された者の心の傷に触れあう言葉を語り続けた。各地に残る民俗芸能も大きな役割を果たしている。東北の鹿踊りやじゃんがらのような盆に営まれる芸能は、もともと亡くなった人々の冥福を祈る芸能であった。これらの芸能は、災害で亡くなった多くの人々を弔い、残された人々の心を慰撫してきた。

さらにいえば、日本の祭礼の起源には人々の災害に対するリアクションという側面が見られる。日本を代表する都市祭礼、京都の祇園祭は、約1000年前に起きた貞観地震や富士山噴火といった国を揺るがす天変地異を鎮め、京内の穢れをはらうために始まった。あるいは東北の秋田県に伝わる鹿嶋祭りも、天明の大飢饉などの社会的な危機を契機としていたとされる。

このようにみていくと災害文化とは、災害に対する備えや減災を目的とした活動に限定されるものではないことがわかる。突発的で理不尽な災害を少しずつ馴らし、日々の生活のなかに組み込んでいく営みの総体にはかならない。確かにそのような営みは、災害に対して受動的な面が大きいという指摘もあり得る。今日の技術や科学的知見をもつてすれば、もっと災害を軽減し、多くの人たちの心身をケアすることも可能だろう。大事な点は、これまで培ってきた多くの文化を再認識し、現代的な知見と組み合わせつつ、緩やかな広がりの中で災



上/図1 地震前の皆月海岸の様子  
下/図2 地震後の皆月海岸の様子

### 価値の再発見⑥

# 災害文化の共創にむけて

—海は与え、海は奪うとしても

川村清志 (国立歴史民俗博物館)

キーワード 災害文化、災害、減災、共創、レジリエンス

私の主要なフィールドである。30年通い続けた輪島市の皆月は、日本海を臨む小さな浦に位置する。かつてはイワシの刺し網漁を中心とする多くの漁業者が、海と切り離すことができない。皆月の夏祭りも、海と切り離すことはできない。祭りの中心となる曳山も舟の形を模しており、波が打ち寄せる砂浜を引いた。しかし、今日、海上安全や大漁祈願といった題目とは裏腹に、海を生活の場にしていく人はほとんどいない。人々の生活

を支えるには、この浦は小さすぎた。しかし、生活を支えることはできなくとも、その浦は人々の想いや記憶を支えてきた。都に出た者たちも祭りの日には戻ってきた。イワシ場で賑わった浜が海岸道路に変わっても、曳山は浜風をうけて、アスファルトのうえを進んでいく。海を与え、さらに与え続けたのである。

しかし、すでに述べたように、皆月の海は3m以上、隆起し、地元の港も完全に干上がった(図1、2)。人気がない多くの家屋は、解体の日を静かに待つだけである。この圧倒的な災害の傷痕に対して、即効性のある処方箋を見出すことは困難である。過疎化の進む個別の集落や地域だけでは、この規模の災害を乗り切ることが不可能だろう。そこで育まれてきた文化を広範な社会集団やネットワークにつなげていき、海とともに暮らす意味や海から与えられたものの意味を振り返る、そんな地道な活動が必要とされている。まずは、地域で生きる人々の声を聞き、埋もれかけた文化を呼び起こすことからしか、新たな時代の災害文化を共に創り出す機運は、高まっていかな



## 価値の再発見⑦

# 伝統的生態学知識を 保存継承する 海の民話と アニメーション化

小坂典子 (公益財団法人日本交通公社)

キーワード 伝統的生態学的知識、海の民話、民話のアニメーション化

### はじめに

伝統的生態学知識 (Traditional Ecological Knowledge, 以下TEK)は、地域社会が長年にわたり自然生態系と相互作用する中で形成されてきた、知識・信念・実践の統合的体系である(大村、2002)。特に海洋に関するTEKは、漁業、航海技術、気象予測、生態系管理、海洋生物の理解など、多岐にわたる知見を含んでいる。これらの知識は主に口承により世代を超えて伝承されており、民話はその主要な手段の一つとして機能してきた。

四方を海に囲まれた日本では、各地に海にまつわる民話が存在している。これらの民話には、潮の満ち引き、魚の習性、嵐の兆候といった生態学的知識が織り込まれ、それらが語り継がれることで、その土地での生活に必要な知識や行動が世代を超えて浸透してきた。また、こうした知識の蓄積は、結果的に防災や減災にも寄与していると考えられる。

本稿では、TEKと海の民話の関係を考察し、最後に海の民話をアニメーション化する意義について述べてみたい。

### TEKを語り継ぐ 技術としての民話

海の民話は、特定の海域における生態系の特徴や自然現象に関する知識を物語として伝えるとともに、海への畏敬・感謝、漁業や航海の安全、災害への備え、土地の特性など、多様な学びを提供している。例えば、

り、これを後世に伝える手法として海の民話が重要な役割を果たしてきたことを述べてきた。

TEKは、科学的方法論に基づいた知識と比較される際に軽視されがちであったが、近年、その重要性が再評価されている。Kimmerer(2002)は、TEKが単なる民間伝承ではなく、長年の観察と実践を通じて発展した「科学的知識体系」であることを指摘し、科学教育や政策決定への統合の必要性を主張している。

他方で、現代においてはライフスタイルの変化、地方地域からの人口流出、世代間交流の希薄化などにより、民話を含むTEKの伝承機会が減少している。

こうした状況下で、民話のアニメーション化は、TEKの保存・継承のための新たな手段として評価されるのではないだろうか。口承による世代間の交流、コミュニティ帰属意識醸成効果等は一定程度薄れる可能性も否めないが、デジタル化による記録保存や環境教育への活用等も期待される。

### おわりに

本稿では、海の民話がTEKの伝承に果たしてきた役割について考察し、そのアニメーション化が今後の社会においてTEKの継承手段として有効である可能性について述べた。民話のアニメーション化は、地域ごとの固有の知恵や教訓を記録し、次世代へと継承する手法となり得る。また、デジタルアーカイブの整備により、TEKの保存と活用の新たな可能性が開かれるのではないだろうか。

宮城県七ヶ浜町に伝承される「大根明神のアワビ祭り」は、同地域の良質な漁場が岩礁地帯にあり、高度な航海技術を要することを、地形や神話と結びつけて語り継いでいる。この民話を通じて、当地における海の重要性や信仰との関係を読み取ることができる。

「大根明神のアワビ祭り」の概要  
昔、花洲浜に向かう親船が、急に荒れた海に襲われた。船が大根明神の岩礁を通過した際、突然、船底に穴が開き、大量の海水が流れ込んだ。船員たちは必死に水を汲み出したが、状況は悪化するばかりであった。船頭が鼻節神社に向かい、神に助けを請うと、不思議なことに海水の流入が止まり、無事に浜へ辿り着いた。船底を確認すると、大きなアワビが穴を塞いでいた。この出来事以来、村人たちは鼻節神社の祭りに生きたアワビを供えるようになったと伝えられている。  
(海と日本プロジェクト in なぎさ実行委員会 2019)

### 民話が伝える知識と教訓

- 1 海域の危険性…民話に登場する「入ってはいけない場所」は、岩礁など海底地形の危険性を示唆していると同時に、豊かな漁場の形成に関する知識も内包している。
- 2 地域文化の起源…アワビ祭りの由来を知ることで、地域の伝統文化や海の恵みに対する感謝の念を学ぶことができる。
- 3 地名の由来…「鼻節」と「花洲」は、同じ語源を持ち、歴史的な変遷の過程で異なる表記が定着したとされる。
- 4 消失した信仰の記憶…「大根明神」は、かつて海底に存在した神域であり、貞観地

震(869年)による地盤沈下により失われたが、その名が今も伝承されている。

「海ノ民話のまちプロジェクト」では、2018年より日本各地に伝わる海の民話を発掘し、地域住民や関係者と協力しながらアニメーション化する取り組みを進めている。2025年1月時点で92本の海の民話がアニメーション化され、2024年からはそれらを体系的に整理し、データベース化する作業も開始している。

データベースは構築中であるが、その作業を通じて明らかになったことは、いずれの民話にも地域固有の教訓や知恵、すなわちTEKが含まれ、それが世代を超えて共有される物語として成立している点である。また、興味深い点は、各地域で語り方の違いがあるものの、共通して「後世に伝えるべき事象」を各地域固有の具体的なモノや出来事と結びつけ、物語化することで世代間の共有が可能になっている点である。TEKとは、その土地で暮らしていくための知識・実践・信念の体系であり、民話はそれを次世代へ受け継ぐための手法として機能してきた。つまり、民話は物語という範疇を超え、TEKの継承を担うひとつの手段として人々の暮らしのなかに根付いてきたとも捉えられるのではないか。

### 海の民話を アニメーション化する意義

ここからは将来に視野を広げたい。これまでTEKは長年にわたって自然環境との共生を通じて培われてきた知識体系であ

## はじめに

民謡と民話は、共に日本各地で口承されてきた伝承文化である。民謡は地域の生活や労働に根ざした歌であり、民話は神話や伝説を物語として語り継いできた。両者は共同体の文化を形成する重要な要素となっている。

本研究では、民謡と民話の共通点を整理し、地域文化の継承における役割を考察する。さらに、民謡が民話の記憶媒体として機能する可能性に着目し、その伝播や変化を比較することで、継承のあり方を明らかにする。

## 民謡と民話に共通する文化的要素

### 1 地域性

民謡と民話は地域の特色を反映し、その土地の気候、産業、信仰などが表現されている。

民謡のひとつ「ハイヤ節」を例に採ると、同じ歌が土地ごとの影響を受け、旋律や歌詞が変化しながら、地域独自の民謡へと発展した〔注1〕。民謡もまた、地域の伝説や社会的価値観を映し、その土地に根付いた物語として受け継がれている。日本各地には村を守る神々や地形にまつわる民話があり、それぞれの地域の文化や自然環境が色濃く反映されている。

### 2 口承性

民謡と民話とともに口承文化として伝

えられ、歌い手や語り手によって表現が変化する流動的な性質を持つ。

民謡は、地域や世代、歌い手によって歌詞や旋律が変化することが多い。民謡も語り手によつて表現が変化し、地方ごとに結末や登場人物の設定が異なることがある。どちらでも地域の風習を反映したものと見える。

### 3 実用性

民謡と民話は、実際の生活の中で重要な役割を果たしてきた。

民謡は、共同作業の効率を上げるだけでなく、危険を回避する目的でも用いられた。たとえば、労作歌は作業のリズムを整える役割を持ち、また道中では獣に襲われないよう警戒を促すためにも歌われた。民謡は地域のルールを伝え、社会の秩序を維持する役割を担っていた。それは、現代に制作された「海ノ民話アニメーション」にも反映されており、海難事故や自然の危険性を伝える物語が多く含まれている。こうした話には、危険を回避するための暗黙のルールとして受け継がれてきた。

### 4 信仰性

民謡と民話の多くは、地域の信仰と深く結びつき、神々や自然への畏敬の念を表現する手段となってきた。民謡では、五穀豊穡や海上の安全を願う歌など、生活の中の祈りとともに伝承されてきた。民話においても、神や妖怪の存在が描かれ、人々が自然と共存する意識を育んできた。禁忌や安全祈願を伝える民謡も多く、これらは地域の信仰と密接に関わりながら、社会の教訓や知恵として受け継がれている。

## 民謡と民話の関係性と継承の役割

### 1 民話から派生した民謡の事例

#### (1) やちや坊節

やちや坊節は鹿児島県奄美群島に伝わる民謡であり、伝説の人物「やちや坊」に由来する。やちや坊は、山で育った子どもで、島中を自由自在に駆け回り、畑の野菜を盗むなどのいたずらをして村人たちを困らせていた。一方で、盗んだ収穫物の一部を貧しい人々に分け与えることもあり、その行動から憎めない人物として民話にも描かれている。その姿は島の人々の心を打ち、奄美大島や喜界島ではヒーロー的な存在として語り継がれ、民話としても残されている。そして、やちや坊の伝説は奄美群島一帯で民謡としても歌われるようになった(日本放送協会、1993・片倉、2014)。

やちや坊節は正月などの祝いの席でも歌われ、歌い継がれてきた。また、やちや坊が住んでいたとされる伝説の岩屋が今も奄美大島に残されており、供え物を捧げる光景

で伝承されている。

## 民謡と民話の現代的継承

近年、民謡や民話の伝承方法は変化しつつあり、デジタル技術や映像メディアを活用した新たな取り組みが進められている。その一例として、「海ノ民話のまちプロジェクト」では、全国の海にまつわる民話をアニメーション化し、幅広い世代に伝える試みが行われている。

例えば、山梨県富士川町に伝わる「まりつき唄」は、姉妹の悲劇的な物語をもとにした民謡であり、わらべうたとして伝承されてきた。かつて天神ヶ滝では水難事故が多発し、子どもたちはこの歌を通じて海の危険を学んだと考えられる(一般社団法人日本昔ばなし協会、2024)。こうした民謡の伝承は、現代では歌い継がれる機会が減少しているが、アニメーションという新たな手法を通じて再び注目されるようになった(図2)。

このように、視覚メディアの活用は、民謡や民謡の伝承方法を拡張し、新たな受容の形を生み出している。



図2 海ノ民話アニメーション「まりつき唄」  
唄はもともと上に投げて遊ぶものだったが、ゴム鞠の普及により弾ませる遊びへと変化した。アニメーション化によって、その変遷が直感的に理解できるようになっている

### 価値の再発見⑧

# 民謡と民話のつながり

—文化を伝える歌と物語—

佐藤千春 (一般社団法人民俗文化興隆協会)

キーワード 民謡、民話、口承文化、継承、アニメーション

従来の口承文化は、歌い手や語り手を介して伝えられてきたが、アニメーションを通じて伝承では、視聴者がより直感的に物語を理解できるため、地域文化の継承に新たな可能性をもたらしている。

### まとめ

本研究では、民謡が民話の記憶媒体として機能し、民謡が人々に親しまれることで民話の内容も長く記憶されるという相互作用が確認された。具体的な事例を通じて、民謡が地域の歴史や文化を伝承する手段として機能していることが明らかになった。現代ではアニメーションを活用した新たな継承方法が登場し、伝承の形が変化している。今後は、こうした変化が、地域社会にどのような影響を与えるのかを検討することが重要となるだろう。

〔注1〕「ハイヤ節」は熊本県天草市牛深町に伝わる民謡である。北前船の往来によって日本各地に広まり、地域ごとに独自の民謡へと発展した。  
〔注2〕歌詞の「猫」は動物の名称ではなく、遊女の別名として使われていた。一部の地域では「猫が恩返しをする」話が遊女文化とも結びついている。(竹内勉、2018)「日本民謡辞典II 関東・甲信越」北陸・東海」朝倉書店、388。

# 海への「おそれ」が芽生えるか!?

## 萩博物館「海の妖怪展」の挑戦

堀 成夫 (萩博物館)

キーワード 畏怖の念、海、萩博物館、展示会、妖怪

令和に生きる子供達に向け「海の妖怪」を展示しよう！ただ、史上初の妖怪の展示会というわけではない。これまでにも各地の博物館や美術館で妖怪にまつわる文書、絵図、浮世絵、掛軸などが展示され、昔の人々がいかに妖怪を想像・創造し、デジタル化していったかを楽しみ学ぶことのできる貴重な機会が与えられてきた。その人気が二ノズは今後も衰えることがないだろう。

しかし、山口県萩市の萩博物館には少し違う実情があった。当館は17年前より毎年、深海魚・危険生物、はたまた未確認生物など、エキセントリックな生きものをテーマに、ストーリー仕立てで迷路のような会場をつくり、子供達に標本や資料を見たり触ったりしながら探検してもらおう展示会を行ってきた。そのスタイルで、次は妖怪を展示してほしいとの声がいくつも寄せられていたのである。また、怪異と関連づけられること



図5 会場の一角に、現代の萩の海の異変・珍魚・怪魚などをぎっしり集めて展示

らし、人智を超えた自然現象に遭うと恐怖や不安を抱えてきた。妖怪はそんな人の心の変化から生まれたものであり、その源泉は、昔の人の心にあった海への「おそれ」(畏怖の念)なのだ。と。

萩で妖怪を体験・体感できる！萩博物館がまた変わったことをやっている！と話題を呼び、本展は約2ヶ月の会期中に地元・萩市の人口を上回る約4万5千人の来場が市内外からあった。しかし私は、昔の人にあった海への「おそれ」に気づいてもらうだけでなく、それを現代の子供達に「芽生えさせる」ことまでできないか、と考えた。

そこで、おそらく前例がないであろうことに挑戦した。会場の末尾に、本展のストーリーのエピローグとして、現代の海の「怪異」をぎっしり展示したのである(図5)。「アマビエ」のモデルとも考えられるリュウグウノツカイなどの深海魚が近年、なぜか萩近海に頻出している。水温の変化のためか、毒があると恐れられているヒョウモンダコやガン

のあるリュウグウノツカイなどの海洋生物が萩には以前からよく出現し、その謎に心が寄せられていた。ならば、当館の記念すべき開館20年目の2024年夏、海の妖怪の展示会に挑もうではないか。

学芸員や研究員、実行委員による協議、関係者や事業者との試行錯誤の末、昨年7月9日、当館の約400㎡の会場に次のような、その名も「海の妖怪展」が開幕した(図1)。まず、入口ゲートをくぐると、薄暗い海のような廊下に何人かの女性の絵がうつすら照らし出されている(図2)。それはレンチキユラー印刷されていて、そばを通ると一転、長崎県などの海辺に伝わる「濡女」や「磯女」に変化して見えるのだ。ゾツしながら足早に過ぎると、今度は日本各地の海辺の妖怪の伝承がたくさん掲げられた空間に出る。とても全ては読み切れないが、おびただしい数の伝承に囲まれ

ると、日本人がこれほどにも海に怪異を見出してきたのかと感嘆せずにはいられない。その傍らには、三重県志摩地方の海女が妖怪「共潜」から身を守るためおまじないの印「セーマン・ドーマン」を描いて身につけてきたイソテスグイ(鳥羽市立海の博物館蔵)が展示されている(図3)。それは、海に生きる人々が海の超自然的な力を信じてきた証として異彩なオーラを放つ。さらに進むと係員が待機しており、その先は柄杓を一本ずつ持つて行くよう勧めてくる。用意された柄杓は、なぜか底が抜けている。訝しみながら受け取って真っ暗な通路をおそるおそる歩くと、周囲の壁にめらめらと青白い光がうごめき、どこからともなく「柄杓を貸せ」と声が聞こえてくる。「船幽霊」だ！昔の人は船の底にたまる水を汲み出すため柄杓を積んでいたが、海で死んだ人の霊とされる船幽霊はそれを借りて海水を注ぎこんで船を沈めようとしてくるという。昔の人は、そんな時には底の抜けた(または穴のあいた)柄杓を渡せば水を注がれず逃れられると言いつづけてきた。それにちなみ、会場でも底なし柄杓を船幽霊の絵に投げ込むと先へ進むことができる(図4)。その後、「海坊主」などの絵図、妖怪「ダングラボッチ」を撃退すべく編み出されたという三重県波切の「大わらじ」(志摩市歴史民俗資料館)、実在の魚介類がモチーフと考えられる「鰐鰯」「龍魚」「蛇蝎」、「クワイマックス」は「河童」「人魚」そして「アマビエ」；と、日本各地の海の妖怪とその周辺や背後のモノ・コトを観覧・体験・体感していくうちに、妖怪の本質に関わる大事なことに気づいていく。昔の人はいつも自然と共に暮

がぜも増加している。海底では、海藻が無残なほどに姿を消しつつある。科学や医学が発達していない時代の人々なら、このような異変や怪異を目の当たりにした暁には恐れを抱き、何かしら教訓や前兆を告げる妖怪を創造していたに違いない。そんな異変や珍魚・怪魚の標本や写真をいくつも目の当たりにしてもらったのである。そして、それらを見て感じたことをモチーフに妖怪を創造してもらおう「海の妖怪創作コンクール」を展示後のオプショントとして行った。

このコンクールには109点の作品が寄せられた。萩の寺院に「大蛇の頭」として伝わったサメの頭のミイラをモチーフに、環境変化をもたらす人々を戒めるべく、尾から危険な炎を出す妖怪を描いた小学生の作品は最優秀賞を受賞(図6)。ほかにも、人物、生物、魔物などを自在に改造して環境変化を人々に伝えたり警告したりする妖怪



図6 「海の妖怪創作コンクール」の最優秀作品「蒼炎毒蛇」(藤田大耀さん作)。青い炎をまとった尾のあたりに、現代の環境異変の一因・海洋ゴミが見える。傍らでは、古来の海坊主や平家蟹が圧倒されている

が続々。現代、妖怪はアニメやキャラクターとして娯楽的にも親しまれているので、子供達はその感覚で楽しみながら創作意欲を燃やしてくれたのだろう。しかし、数々の作品の奥底に、昔の人ほどではないにせよ、海への「おそれ」のようなものが見えるのだ。子供達は本展の序盤から中盤にかけて、日本人がいかに海を人智を超えた存在と見なしておそれていたかを知り、いくらか共感できる部分に気づいたり、自身にも似たメソッドがなくてもないと思ったりした子供もいただろう。そこへ、現代の海の環境異変の数々が目に飛び込んでくれば、科学で説明できる・解決できるはずの現代でも、人智や科学が海の見えない力に凌駕されているような戦慄や不安を感じたに違いない。程度の差はあれ、現代の子供達に海への「おそれ」がわずかながらも芽生えたのではないだろうか。

現代、日本各地で海、環境異変が起こっている。海以外でも様々な自然環境の異変や災害が毎年のように発生している。子供達はこの先、間違いなくその中を生きていかねばならない。そんな時代に、もちろん科学の知識や技術を駆使して解決したり乗り越えたりすることは重要である。一方で、頭の片隅にでも、海は人智を超えうるものなのだという「おそれ」をもつことは、異変や災害を予感したり、海に対するこれまでの行動を省みたり、海の未来に思いを巡らしたりと、これからの時代を生きていく「術」としてあえて必要なのではないだろうか。

昔の人々が海への「おそれ」をもつていたことに気づいてもらう上で、各地で語り継がれてきた昔話や伝説などを伝える絵本やアニメ、紙芝居などのメディアが果たす役割は大きい。そこへ、様々なメディアの意図を三次元化して観覧・体験・体感・探究させられる博物館は、海への「おそれ」を再燃させたり芽生えさせたりするツールとなりうる。と提起したい。海への「おそれ」を巡る萩博物館の挑戦は、これからも続いていく。

### 謝辞

ここで取り上げた萩博物館の「海の妖怪展」は、船の科学館「海の学び・ミュージアムサポーター」プログラム「海の企画展サポーター」の支援を受けることにより実施することができた。同館の担当者や関係者の方々、および、本展の企画・準備・実施において情報提供や資料貸出など多岐にわたってご協力を賜った志摩市歴史民俗資料館、鳥羽市立海の博物館ほか全国各地の博物館・美術館等の学芸員や担当者の方々に深謝する。



図1 萩博物館「海の妖怪展」のポスター・リーフレット



図2 入口ゲートをくぐって廊下を進む子供達。この先、女性の絵のそばを通り過ぎようとする...



右/図3 会場内のメイン部分。資料やグラフィックだけでなく、ギミック、デジタル演出、妖しい照明などを施した迷路のような構造  
左/図4 来場者が船幽霊と対峙するギミックは、SNSで大きな話題を呼んだ

## 「子どものための民話」を生んだ近代

民話は誰のものか。かつて、民話は子どもたちのものというイメージがあった。明治期には巖谷小波や久留島武彦が近代化する日本の将来を担う児童の教育に民話を活用すべく、民話を再話した「お伽噺」や、民話をステージで朗読する「口演童話」で人気を博し、民話＝子どももの、というイメージを世に広めた。大正期に入ると、大人にはない子ども独自の純真無垢な感受性や空想力を大事にするべきだとする「童心主義」に抛り、蘆谷蘆村が創刊した雑誌『童話研究』や、鈴木三重吉が主宰した雑誌『赤い鳥』に、童話を研究して創作し、児童教育に役立てるという姿勢の作家・研究者・教育者が集うようになった<sup>【注1】</sup>。その中で子どもを善導するための読み物として、日本の民話の再話や外国の民話の翻訳や翻案がなされ、また創作民話——民話風の創作童話——も生み出された。「民話は子どものためのもの」というイメージは、すぐれて近代の所産なのである。

こうした「子どものための民話」という言説に批判的だったのが、日本民俗学を確立する柳田國男である。柳田は昔話や伝説は地域の生活や歴史に根差したものであり、儀礼の場で大人たちが伝承していたが、後世になって信仰が緩み、日常子どもたちを相手に語られるものへと変化化したとし、始めから子どもたちのものではなかったと説いた。

しかしながら今なお、民話は子どもにも語

り、伝統行事・郷土料理・方言などの調査研究を対象とする「地域文化研究部門（個人・団体）」、昔話・伝説など民話の調査研究を対象とする「地域民話研究部門（個人・団体）」、学校やクラス単位での生徒による調査研究や活動実績を対象とする「学校活動部門」の3部門で構成されている。このコンテストの狙いは、高校生に各自が生活する地域に固有の民俗文化や民話があることを発見してもらうことにある。そうした地域の民俗文化や民話を調査研究することを通じて、地域の先人たちが伝承してきた文化から現代に通じる何かを学び、さらには地域の伝承文化を次代へとつなげる契機として欲しいという願いも込められている。

こうした呼びかけに対して、毎年多くの高校生が個人・団体での調査研究の成果を応募してくれている。2024年の入賞作品の題材を挙げると、「河童伝承」大森彦七・落武者伝説「青葉の笛伝説」旧字の考察「阿黒王伝説」日蓮伝説「釣鐘池伝説」と、いずれも地域に根差した題材を取り上げ、深く掘り下げることがわかる。

ではこうした民話に高校生はいかにして出会っているのか。「高校生新聞ONLINE」の2023年・第19回受賞者へのインタビュー（株式会社スクールパートナーズ、2024）から見てみたい。

地域民話研究部門（団体）優秀賞に輝いた浜名高校史学部「浜松市天竜区鹿島に伝わる不思議な金貸水神伝説の起源——なぜ「水神様が病気を担保にお金を貸す」のか——」は、病気を担保にお金を貸してくれるという不思議な水神信仰と、その縁起を

### 新たな価値の創造②

# 高校生たち、地域の民話から学ぶ

飯倉義之（國學院大學文学部）

#### キーワード

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト、童話、柳田國男、地域研究、郷土史、フィールドワーク

るもの、というイメージは世の中に広く定着しているのではないだろうか。さらに現在では生活の中に民話が生きていることを実感する機会は稀である。民話に絵本やテレビアニメでしか接したことがない人は多いだろうし、その話の内容も「鶴の恩返し」や「おむすびころりん」など全国的に知られたものが中心だろう。さらには「シンデレラ」「白雪姫」などの外国の民話、さらには「かぐや姫」のような古典文学の再話や、「人魚姫」「親指姫」「マッチ売りの少女」<sup>【注2】</sup>のような近代に創作された児童文学作品まで「民話」として知られているのが現状ではないだろうか。現在の私たちは、生活の中に息づく民話と出会う機会が希薄なのである。

説明する民話とを丹念に調べたことが評価されている。病気を担保に借金するということは、借金を返さなければ病気が借金のカケとして取り上げられてしまうということであり、つまりは病氣平癒祈願の一形態なのだが、このような形をとる祈願は全国的にも珍しい。この伝承との出会いについて、史学部の生徒は次のように答えている。

「一冊の本を読んだことが研究のきっかけで、水神社の存在自体は通学する度に見かけていたので知っていましたが、伝説の存在までは知らなかったもので、その内容のユニークさに驚きました。「病気を担保にお金を貸す水神」という話ができた背景を知りたいと思い、研究を始めました。」（株式会社スクールパートナーズ、2024）

日々見ているはずの水神に関する伝説は、その近くで学校生活を送る高校生には共有されておらず、「一冊の本」から文字を通じた知識として初めて知ることができた。現在において民話は、生活の中で自然と知るものではなく、資料を調べて初めてその存在を知るものとなっているのだ。これは浜名高校史学部だけの事情ではないだろう。通学する生徒たちはそこで大半の時間を過ごしているながらも、学校外の地域の文化とは隔絶した環境に置かれがちである。しかし民話を調べる過程を通じて、単なる通学時に通過する空間としてではなく、歴史や文化が蓄積された重層的な空間としての地域を再発見することができたはずだ。民話を知ることがすなわち、その地域の一員となることでもあるのだ。

かつては地域や家庭内で生活の一部として伝承されていた民話も、生活やコミュニ

## 地域の文化としての民話と出会うために

民話が子どものために作られたものではなく、地域の文化として生まれ、伝えられてきたことを学んでほしいという意図で企画されたのが、高校生新聞社と國學院大學が共催する「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストである。2024年に第20回が開催されたこのコンテストは、高校生を対象として「各地域に伝わる昔話・伝説や祭り・伝統行事・郷土料理・方言などの文化の調査研究や、学校や部などで行っている地域研究活動の実践報告を募集」するもので、祭

ケーションの変化により伝えられる機会が少なくなっている。私たちは、地域の民話が多量に共有されておらず、資料などを読んで主体的に知ること初めて共有されるという、現在の民話をとりまく状況をきちんと受け止める必要があるだろう。その上で、民話を知ることの意義をもまた、見つけ直さなければならぬ。民話を知ることとは、その地域を生きた人たちの伝承文化を知ることである。民話を知ること、地域が単なる空間ではなく、豊かな意味を持った場所として立ち現れてくるはずだ。知ることとは民話を「自分のもの」とすることであり、地域の伝承文化を生きた生活者となることなのだ。

地域の伝承文化を繋ぐためにも、こうした「民話を知る」機会が今、必要とされている。「民話は誰のものか」という問いに「他ならぬ私たちのものです」と主張できる生活者あつてこそ、地域の伝承文化は引き継がれていくものであるだろうから。



【注1】北原白秋（1885～1942）、新美南吉（1913～1943）、小川未明（1882～1961）らが寄稿し、現代まで読み継がれ、歌い継がれる作品が発表された。

【注2】デンマークの童話作家・詩人のハンス・クリスチャン・アンデルセン（1805～175）の手による創作／児童文学作品であり、語り継がれた「民話」ではない。

## 島人の記憶にある蛇と雨

令和7年の干支は巳年。利尻島では蛇と大雨が結びついていた。利尻町香形にある北見富士神社の祭典において香具師が蛇を身体に巻き付ける演芸のときに例年になく大雨が降ったことを島人たちは利尻の女の神様が嫌いな蛇が島に来たからだと言っていた。このことは70歳前後の島人たちの幼い頃の記憶による。現在よりも60年ほど前のことと思われる。北見富士神社祭典の大雨が蛇と女神様に繋がっていたのはその時からなのか、それ以前からなのかはわからない。島人の記憶にある神社祭典と蛇と雨と女神様のことは、宗谷バス利尻営業所のバスガイドが利尻島を紹介するシナリオに書き綴られている。利尻島に蛇が生息していないのは島の女神様が蛇を嫌っているからだともある。現在では神社祭典で香具師たちの来島はかつてのような賑わいがなく、蛇やサーカスなどの演芸などがまったく見られなくなったからなのか神社祭典で多少の雨が降っても蛇と結びつけて語られることはほとんどない。主に還暦を超えた島人たちの記憶にとどまっているだけで、若い世代に語り伝えられていないと思われる。

## 海の道を渡った伝説

現代において利尻島の伝説に出会うのは

利尻山と繋がる樺太の山は松浦武四郎の『武四郎廻浦日記』や『唐太日記』、松田伝十郎の『北夷談』や『日本地理大系第十巻 日本・樺太篇』などに書かれている。『武四郎廻浦日記』巻之十五・巻之廿と『唐太日記』下巻にみえるトッソ（近代以降の文献では突阻山）は「其形リイシリによく似たり、依て土人リイシリの婦山（メノコヤマ）なりと云」とある。『武四郎廻浦日記』巻之廿にトウコタンは利尻山の女山で「リイシリの岳と夫婦」、『北夷談』にはトウキタイウツシリは「リイシリ山の女と昔より夷人共申伝へし由」とある。利尻山と直線距離でトッソは300km以上、トウキタイウツシリは200km以上あり、樺太にある二つの山から利尻山は見えない。

近世以降の利尻島と利尻山伝説はいずれも利尻島の外界のアイヌの人たちの語りである。海の道を行き来するアイヌの人たちにとって、海上にそびえ立つ利尻島はどのような意味を持っていたのかの疑問が果てなく広がる。

## 利尻島の歴史を 民話に紡ぎ創る

さて、こうしてみてきた近世以降の史料にみえる利尻島・山の伝説は島の外界のアイヌの人たちの語りである。利尻島の外界において外界の沼や山と繋がるアイヌの人

近世以降の文献に書き綴られているものだけである。樺太や北海道本島の沼から利尻島が抜け出したこと、道央の山の一部がもぎ取られ川を下って海に出て流れ着いたこと、利尻山と樺太の山が夫婦として繋がっていることである。

利尻島が樺太や北海道本島の沼から抜け出したことは松浦武四郎『西蝦夷日誌』巻之七や『武四郎廻浦日記』にある。『西蝦夷日誌』巻之七の天塩のところに「上に沼長廿余丁中七丁 其深サしれ難しと。土人の言に、此処よりリイシリ山は一夜に抜出たりと云り。靈有とて土人此沼を崇信す」とあり、稚内のところに『峠エナヲトウゲに至るや神沼周リ八丁 リイシリ島は是

### 新たな価値の創造③

# 利尻島の歴史を 民話に紡ぎ創る

## 西谷榮治

キーワード アイヌ、語り、記憶、島人、伝説、紡ぐ

より抜出たりと云て、土人至て尊信して、エナヲを指て通る也」とある（秋葉、1988）。天塩の沼はサラキシ沼で現在は埋め立てられている。稚内のエナヲトウゲの神沼は南稚内の坂の下の龍神沼である。『日本地理大系第十巻 日本・樺太篇』には利尻山によく似た形の樺太の突祖山より二里ほど奥のところから利尻山が飛びさり、その跡が大きな沼になっているとある（山本、1930）。『北海道の伝説』には札幌の近くの千歳の近くにあった山がある年の大海嘯でもぎとられて、石狩の長沼にあるサマッキヌプリにぶつかって山を横ざまにねじり倒しそのまま石狩川から海に出て流れ利尻島になったとある（更科・渡辺、1952）。

い鬆だった、年とつた何人かは黒い毛皮をまとい小さな刀をひとつ帯びていた、家の前に棹台があり魚が林のようにかけられ鯨の干し肉も山のように積まれていた、14日目丘に登って四方を眺めて東北側に見えた陸地に小さな海をひとつ越えて船を着けた、泰山と同じような人たちが住んでいた。

『漂舟録』にはこのように1696年に漂着した泰山の様子と利尻島と出会ったアイヌの人たちのことが詳細に書かれている。このような泰山・利尻島のことを物語として編むならば利尻島の歴史を史実に基づいて現代に伝えることとなる。そこで大事なことは、「なぜ」「どうして」という疑問を表すことと思う。「20余軒の草家があり家中に鱈と鯨が無数にかけられて」いるのはどうしてなのか、「鯨の干し肉」はどうするのかなど、疑問を提示することによって状況を思い浮かべ理論的に組み立てていくことが歴史を知ることになると思われる。

四方を海で囲まれた利尻島はいつの時代においても海とともに生きてきた島人たちの歴史が刻まれている。利尻島の歴史を現代に伝え、未来の島のあり方を思うときに、それぞれの時代において海とともに生きてきた島人を「なぜ」「どうして」を組み込んだ民話を創っていくことが未来の島のあり方に繋がるとことになると思われる。必要なのは、利尻の海と島人の民話と島の歴史とを紡ぎ創ることである。

たちの伝説が書かれている史料に接したことはない。近世末から北海道本島や本州の日本海側から利尻島に渡って来た人々には、近世のアイヌの人たちの伝説が語り伝えられていない。利尻島の近世のアイヌの人たちのことを知ることができるのは史料だけである。アイヌの人たちが近世をどのように生きていたのかを知ることは、現代を生きる島人の生き方にも繋げられると思われる。近世だけでなく人が住み始めた古代からの歴史的な出来事を昔話として創り、語り継ぐことが歴史の記憶の風化を防ぎ、歴史を知り歴史から学ぶことになるのではないだろうか。その歴史的な出来事から、その時代をより具体的に知り得るものとして1696年5月に利尻島に漂着した8人の朝鮮人のひとり李志恒が書いた日記『漂舟録』がある（池内、1994、1998）。泰山に漂着するまでを要約すると次のようになる。1696年4月13日朝鮮の釜山発船、4月28日寧海を出帆・漂流、12日目山が青い天にそびえ立ち、山の上に積もった雪が白く見える泰山に近づいた、13日目朝、陸地を眺め上陸すると人の住むようなところはなく山裾に臨時につくられた20余軒の草家があり中に鱈と鯨が無数にかけられていた、14日目朝、人家を探すと西の方に煙が立ち上っているのが見えたので進んだ。船着き場から出てきた5〜6人の容貌はみんな黄色い服を着て黒い髪に長

# 災害民話がつくり出す

## まちづくり—海の民話と地域文脈—

下田元毅 (大手前大学建築芸術学部)

キーワード 津波、広村堤防、祭り、災害伝承、日常と非日常

### 背景と目的

### 民話のまちづくりへの活用可能性とその意義

民話は主に口承によって伝えられるため、その本質的な特徴として無形性であることが多い。海の民話も人々の語りの中で生き続けていることが多いが、災害に関する民話の中には、有形の遺構や習俗とともに伝承されるものもある。例えば、各地で耳にする大津波が村を襲った際、大きな石のある場所まで逃げた者が助かった「津波石」や僧侶が津波から逃げる目安として造り、江戸時代から明治期まで地元の漁師達に代々受け継いできた「妙法寺の石灯笼」(高知市浦戸地区)などがある。これらは、過去の史実にもとづき、石や灯笼などの有形性を伴いながら訓話や教訓として現在に継承されている。

本論では、このような有形性を伴う民話に焦点をあて、現在に引き継がれている海

の民話のまちづくりへの活用可能性とその意義について、建築・地域計画の観点から考察を試みたい。具体的には、災害に関連する和歌山県広川町の「稲むらの火」の伝承事例に着目する。当該事例は、過去の伝承が来るべき南海トラフ地震・津波災害に対する防災面の役割として、地域計画や祭りなど、日常と災害としての非日常のあり方に向けて、実践的に生かされている。本論を通して、民話の翻訳が現在のまちづくりへ向けた展開可能性を見出してみたい。

### 対象地とその民話

### 稲むらの火祭りとは

### 広村堤防

### 1 防災の町として広川町

和歌山県有田郡広川町は、和歌山県の中部に位置し、1955(昭和30)年に広村・南広村・津木村の合併によりできた自治体である。広川町は、1854(安政元)年に発生した津波後、1858(安政5)年に築

民話そのものが祭りという形で具現化され、避難経路としての役割を果たしている。

### 2 避難経路を軸としたまちづくり

広川町では、歴史的な避難経路である「大道(おおみち)」を軸に、防災意識の向上と地域活性化を図る計画が進められている。この大道沿いには、災害伝承を担う施設として「稲むらの火の館」が設置されており、地域の防災教育の中心的な役割を果たしている。この館では、安政の津波の際に濱口梧陵が行った避難誘導の歴史や、津波防災に関する展示を通じて、住民や来訪者

造された「広村堤防」や、堤防築造に尽力した中心人物である濱口梧陵の「稲むらの火」の物語が有名である。防災の町としての活動や歴史的遺産の価値が認められ、平成30年に「百世の安堵」津波と復興の記憶が生きたる広川の防災遺産」(「広川町日本遺産推進協議会、2018」)のストーリーが日本遺産に登録されている。

### 2 津波伝承—稲むらの火と広村堤防

1854(安政元)年の津波の際、広村の実業家であった濱口梧陵は、夜間での津波のため、逃げ遅れた人々のために稲むらに火をつけ、高台への誘導灯として多くの人を救ったという逸話がある。津波で、339軒と広村のほぼ全ての住家が被害を受け、家屋や漁船が流失・破損し、荒れ果てた広村では、津波の再来の不安もあり村を離れる者も出始めた。そこで濱口梧陵は、広村を安全に暮らすことのできる村に復興するため、家や家財一式を流された村民に仕事を与えるため、広村堤防築造の事業を

に対する防災意識の啓発が行われている。さらに、2021(令和3)年には、「稲むらの火の館」の向かいに、物産販売・飲食施設「道あかり」がオープンした。この施設は、地域の特産品を販売するだけでなく、訪問者が防災文化に触れながら地域の魅力を体感できる場として機能している。「道あかり」の開設により、大道周辺の賑わいが増し、地域住民と観光客の交流の場が生まれるとともに、災害伝承と地域振興が一体となった取り組みが展開されている。(図3)

このように、広川町では、歴史的な避難経路を中心に、防災教育・地域振興・インフラ整備が一体となった地域計画が進められている。これにより、津波災害の記憶を継承しつつ、実際の防災対策を強化し、地域全体の防災力向上を図る取り組みが着実に進められている。

### 3 広村堤防の有形性が紡ぐ地域のアイデンティティ

広村堤防は、広川町が所有・管理を行っているが、その維持には地域住民の積極的な関与がある。広村堤防保存会は年に数回清掃活動を実施し、また、個人として裏庭の掃除の延長で堤防の清掃を行う住民もいる。このような地域の主体的な関わりが、堤防の保全と地域アイデンティティの継承に寄与している。

1903(明治36)年には、「安政津波50回忌」が地元有志により催され、以後、安政の津波が発生した11月5日には「津浪祭」として神事と堤防への土盛りが行われるようになった。この行事は百年以上続いっており、地域の伝統として定着している。当



図1 広村堤防 | size: 幅80mm



図2 稲むらの火祭り | size: 幅80mm

私財で始めた。この事業には、津波により発生した瓦礫や塩分を含んだ田畑の土を処理し、年貢が非常に高かった田畑を堤防にすることにより税を減免する狙いもあった。濱口梧陵を中心とした事業により、村民の離散は防がれたという。

広村堤防(図1)は、高さ5m、根幅20m、延長600mである。最高高さは6.13mあり、安政の津波の際に東濱口家住宅の柱に残された津波の痕跡の高さ5.04mを参考に設計・築造されたとされる。津波被害を教訓に作られた広村堤防は、1946(昭和21)年の南海地震の際に発生した津波から広村の集落を守っている。

### 可視化される

### 民話継承の3つの形

### 1 伝承の道をなぞる祭りの軸線

安政の津波から150年後の2003(平成15)年に、火を灯した松明を持ち広村堤防のそばに立地する役場から広八幡神社まで練り歩く「稲むらの火祭り」が地元有志により始められた(図2)。役場から主要道の「大道(おおみち)」を通り広八幡神社に至るルートは、安政の津波の際の避難経路であり、現在も広地区(旧広村域)の住民の避難経路として位置付けられている。祭りの参加者は、稲むらの火が灯るルートを歩き、広八幡神社で神楽を見た後に炊き出しを食べることで、安政の津波当時の追体験をする。さらに、広八幡神社で行われる秋祭りでは、神輿が稲むらの火祭りと同じ大道を通ることで、避難経路としての重要性が改めて強調される。ここでは、

広川町の「稲むらの火」の伝承は、民話だけでなく、その維持には地域住民の積極的な関与がある。広村堤防保存会は年に数回清掃活動を実施し、また、個人として裏庭の掃除の延長で堤防の清掃を行う住民もいる。このような地域の主体的な関わりが、堤防の保全と地域アイデンティティの継承に寄与している。

### 民話をもたらし

### 日常生活に組み込まれた

### 非日常のまちづくり

広川町の「稲むらの火」の伝承は、民話だけでなく、その維持には地域住民の積極的な関与がある。広村堤防保存会は年に数回清掃活動を実施し、また、個人として裏庭の掃除の延長で堤防の清掃を行う住民もいる。このような地域の主体的な関わりが、堤防の保全と地域アイデンティティの継承に寄与している。

地域伝承を現在のまちの文脈に繋がる場所や空間の要素と結びつけ、日常生活の中に翻訳していくことを広川町の事例から学ぶことができるのではないだろうか。

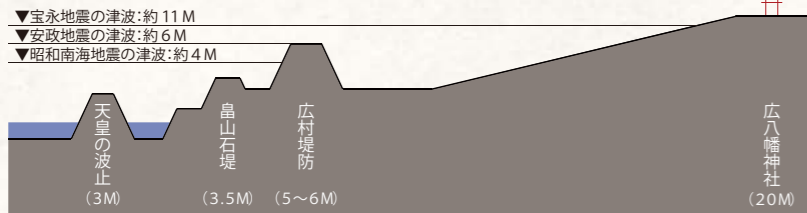


図3 旧広村地区の町の構成(上)、広川町断面概念図(下) | size: 幅80mm



## はじめに

「海ノ民話のまちプロジェクト」(以下、本プロジェクト)は、2018年に始動した取り組みであり、海洋国家である日本に深く根差した「海とのつながり」を次世代に継承することを大きな使命として掲げている。日本列島には、漁業や船乗り、海神信仰、津波や高潮といった海難の教訓など、海にまつわる多彩な民話が脈々と受け継がれてきた。しかし、過疎化や人口減少、気候変動の進行などの社会変化により、口承文化の存続基盤は著しく揺らいでいる。

本プロジェクトは、全国の海の民話を発掘選定し、アニメーションとして公式サイトや動画配信サービスで公開するとともに、民話が語り継がれてきた地域を「海ノ民話のまち」として認定し、教育や観光、防災・減災、環境保全など多面的な利活用を支援してきた。本稿では、ユネスコが実施する「世界の記憶」登録制度の観点から、本プロジェクトの意義と課題、さらに今後の展望を検討する。

## ユネスコ「世界の記憶」の評価基準と近年の動向

1 ユネスコ「世界の記憶」への登録制度  
ユネスコ「世界の記憶」(Memory of the World)は、1992年に創設された国際事業で、歴史的に重要な記録物を体系的に保存・公開し、社会の認知を高めること

行の規定の応用的な運用については当面は難しいようだ。

## 海ノ民話のまちプロジェクトの制度とアニメーション化の仕組み

1 特徴  
そこで、次に、海ノ民話アニメーションそのものが、ユネスコ「世界の記憶」登録に見合うかどうかについて検討した。  
当該プロジェクトでは、「知恵」「想像力」「資産」「地域性」「継承性」という5つの基準によって海の民話を選定し、地域住民や有識者、自治体、制作チームが共同でシナリオ会議やロケハンを重ね、アニメーション作品を完成させる。完成後は公式サイトや動画配信サービスで公開され、地域は「海ノ民話のまち」として認定される。これは単に民話を記録するだけでなく、地域コミュニティが自らの文化的遺産を再評価し、地元の子どもたちをはじめ地域住民や観光客に向けて新しい活用方法を開発する取り組みでもある。

## 2 アニメーションの意義と課題

アニメーションは、口承文化を現代的かつ視覚的にわかりやすく伝達する優れた手法であり、日本のアニメーション技術は国際的にも定評がある。例えば、多言語字幕を施すことで、海洋文化を海外へ積極的に発信できる余地が大きい。

を目的としている。文書や地図、映像、ポスターなど幅広いメディアが対象となるが、海に関する民話のような口承文化は無形文化遺産に分類されるため、本来は登録の直接的対象ではない。

ただし、アニメーションなどの映像記録として定着化すれば、真正性と完全性、所有者の同意、リスク評価と管理計画などの基準を満たすことで登録が検討されうる枠組みがある。登録には世界的重要性が認められる必要がある。

# 遺産学からみた海ノ民話のまちプロジェクトの意義

海ノ民話アニメーションはユネスコ「世界の記憶」に登録できるか

小坂典子 (公益財団法人日本交通公社)  
池ノ上真一 (北海商科大学、般社団法人日本海洋文化総合研究所)

海洋文化、無形文化遺産、アニメーション、世界の記憶、ユネスコ登録

一方、脚本化の過程で加わる創作や演出が、民話の真正性や地域特有の要素をどこまで保持しているかを検証することが課題として残る。また、複数地域にまたがる共通伝承や、追加で見つかった民話をどう扱うかなど、作品全体の一貫性と網羅性を維持する管理体制も不可欠といえる。現時点では世界遺産や無形遺産の制度に見られる追加登録という事例は見られないため、当面は難しいようである。

また、相対的基準については、かつてTBSで放映された日本昔ばなしのアニメーションとは、どのように違うかを説明する必要が想定される。

## 今後の展望

1 ユネスコ「世界の記憶」への登録に向けた取り組み

もし、ユネスコ「世界の記憶」への登録を本格的に目指すなら、アニメーション化に伴う改変の方針や創作の度合いを規定の主旨に沿い明確にし、地域住民や所有者との合意や協力を得たうえで作品全体を管理する計画を示す必要がある。後から追加される民話の扱いや、すでに制作済みのアニメーションの改訂方針なども包括的に定めることで、真正性と完全性を維持しながら映像記録を充実させる枠組みが築かれるだろう。この作業は手間を要するが、それだけに海ノ民話を体系化し、世界へ向けて発信する大きな一歩となる。

められる「国際登録」と、地域的重要性に該当する「地域登録」があり、いずれも厳格な審査を経る必要がある。

## 2 評価のための視点抽出

ユネスコ「世界の記憶」では、保存度(Preservation)・アクセス(Access)・認知度(Awareness)の3点がとりわけ強調される。海の民話をどのように収集・選定し、アニメーション化する際の改変を最小限に

## 3 多面的展開

加えて、こうしたアニメーション作品が観光資源として活用されることで、地域へのアクセスを容易にし、親しみを増幅させる。と共に、地域経済への波及効果も見込める。関連グッズの開発やイベント開催、映像視聴を起点とした現地フィールドワークなど、民話を軸にしたイマーシブ体験や、地域と観光客との共創体験などといった新たなツーリズムが生まれる可能性がある。

また、地元の子どもたちにとっては、自らの生まれ育った土地と海の物語を映像で学ぶ機会が増える。その結果、なぜこの地域に暮らすのか、なぜ自らが存在するのかという問いに対し、肯定的に捉えることが出来るようになり、郷土への愛着やアイデンティティが育まれる利点も大きい。ユネスコ

抑えながら原型を保持しているかは、保存の観点で評価される。

また、アニメーション化はもちろんのこと、インターネットを活用して公開し、多言語化や聴覚障害者対応などを進めれば、世界の誰もが視聴可能となるため、アクセスのハードルが低くなる。さらに、映像を通じて海洋文化の価値や歴史的意義を広く周知できれば、ユネスコの海洋教育や海洋リテラシーを推進する際に用いられる「Ocean Blindness」に対し、認知度向上という面で大きな役割を果たすことが期待される。

## 3 近年の動向と課題

1992年のユネスコ「世界の記憶」制度開始以来、世界各国で登録事例は増加傾向にあるが、デジタル作品やアニメーションに関する登録はまだ限られている。日本国内では申請数に上限(国際登録は2件/回のみ)がある。また、そのためには、国内委員会から独立し、専門家が構成する審査委員会による国内審査に通ることが条件である。

歴史的な文書や稀少な書物との競合も想定されるため、海ノ民話のような新しい形態の映像記録物が選ばれるかは未知数である。日本ユネスコ国内委員会事務局を務める文部科学省担当者からは、申請多数の国際登録よりは、まずはほとんど申請が見られない地域登録から様子を見ることを推奨された。ちなみに、国際登録と両方の登録は可能である。また、2021年に現行制度になってから事例が少ないため、現

「世界の記憶」という国際的な後ろ盾を得られれば、そうした多面的展開をさらに加速させ、海洋文化を多くの人々と共有する力強い基盤となるだろう。

## まとめ

本プロジェクトは、海の民話という無形文化遺産をアニメーション化し、地域コミュニティと連携して多角的に活用する先駆的な取り組みである。ユネスコ「世界の記憶」への登録を念頭に置くことで、創作と原型の境界や作品の網羅性、管理計画の整備など課題は多いが、それを乗り越えることで日本の海洋文化を世界へ向けて強力に発信し、人々が海と人との歴史的つながりを再考する機会を創出できると期待される。今後は当該事業の制度面、地域連携や国際協力の枠組みをさらに充実させ、全国各地に散在する海の民話を活かしながら、豊かな海洋国家としての日本の姿を未来へと伝えていくことが求められる。こうした取り組みを通じて、人と海が織り成してきた物語の新たな価値を共有し、次の世代に誇りと知恵を受け継いでいく道がいつそう広がるであろう。

本プロジェクトは無形文化遺産としての民話と現代社会を結ぶ架け橋としての機能を果たしうる。ユネスコ登録が目的化することなく、地域や世界へ向けた新たな価値創造と持続的な連携のきっかけとなることが大いに期待される。

# 民話の再解釈と多様性.. 文化的視点を取り入れた 物語創造の意義

美馬のゆり (公立はこだて未来大学)

キーワード 民話再解釈、物語創造、文化的表象、包摂的物語、物語教育学、AI生成物語

## はじめに

本稿の目的は、「民話の再解釈と多様性」に関する事例と考察の軸を整理し、今後の研究の基盤を提示することである。今回は、ジャーナル準備号の分量制約により、議論は概括的なものに留まる。しかし、次年度のジャーナル執筆に向けて、より具体的な事例分析を行い、応用可能性の検討を深める予定である。

本研究では、民話を文化遺産として再解釈し、多様性と包摂性の視点を取り入れることで、新たな民話創造の意義を明らかにするとともに、教育実践の方法を探る。民話は、時代や文化の価値観を反映すると同時に、それを超えて新たな価値観を生み

## 民話の再解釈と多様性の潮流

民話の解釈は文化的背景に大きく依存する。筆者が留学中に経験した「赤穂浪士」や「花さき山」に対する異文化圏の反応は、民話が普遍的な価値観ではなく、特定の文化や時代に根ざしていることを示している。これらの経験から、民話を再解釈する際には、歴史的視点を含む、異文化的視点を取り入れる必要があると考える。

社会的変化の中で、1960年代から1970年代にかけて人権意識の高まりが民話や絵本の修正を後押しした事例がある。世界各国で翻訳本が出ている英国の絵本『The Story of Little Black Sambo(ちびくろ・さんぼ)』(Bannerman, 1869)は、ステレオタイプの描写が批判され、1970年代以降、修正版が複数出版されている。また、近年の事例として、2023年に公開されたデイズニーの実写版『The Little Mermaid(リトル・マーメイド)』(Disney, 2023)では、主人公にアフリカ系アメリカ人の歌手が起用され、多様性を重視する価値観が強調された。

2020年に出版された絵本『Bo, the Brave(勇敢なボー)』(Woolvin, 2020)は、日本の民話『桃太郎』と類似した構成を持つが、主人公が、外見ではなく相手の本質を理解しようとする姿を描いている。

出す力を持つ。特に、学習者が民話を再解釈し、現代の価値観に沿った新たな民話を創造することは、思考力・創造力を育み、社会の多様性を理解するための重要な教育的実践となる。本研究では、ジェンダーや固定観念、多様性の欠如といった現代社会の課題に、民話がどのように応答できるかを考察し、その教育的・社会的意義を明らかにする。

筆者は、学習科学(Learning Sciences)を専門とする研究者であり、認知科学・教育学・心理学の学際的視点を基盤としている。学習科学は、学びのメカニズムを解明し、教育や社会的実践へ応用する学問であり、本研究では、民話が多様性と包摂性を推進する手段としてどのように機能するかを探る。

この物語は、子どもたちが他者を受け入れる力を育む教材として意義を持つ。これらの事例は、民話が時代の変化に応じて再解釈され、多様性を取り入れることで新たな意味を獲得することを示している。

このような民話の変遷は、単なる時代適応ではなく、教育現場での多様性理解の促進にもつながる。

## 教育的観点から見た民話の再解釈の意義

1990年代以降、国連が推進する「持続可能な開発目標(SDGs)」や多文化共生の潮流から、民話における多様性についても関心が寄せられてきている。また教育現場では、多文化的視点やジェンダー平等の重要性が注目されつつある。

こうした価値観の変化の中で、学習者自身が民話を再解釈し、現代の価値観に沿った新たな民話を創造することで、思考力・創造力を育む可能性を考えたい。再解釈を通じて、学習者は伝統的な物語に潜む固定観念を批判的に捉え、多様な価値観を取り入れる視点を獲得できるだろう。

また、近年の技術発展により、AIは学習者の創造的プロセスを支援し、多様な視点を取り入れた民話の生成を可能にする補助的な手段となり得る。AIを活用した具体的な支援例として、以下のものが考えられる。

## 本研究の背景

本研究の契機となったのは、筆者自身の異文化体験である。1980年代半ば、ハーバード大学大学院に留学中、邦画『赤穂浪士』の上映会に参加した際、多くの観客が感動する(と当時までは信じていた)討ち入りや切腹の場面で、会場に笑い声が入った。この反応は、民話を含む物語の解釈が文化的背景によって異なることを示していた。同じ時期、『花さき山』(斎藤・滝平, 1969)を、日本的な美しい絵と情感あふれる物語が魅力の、私の好きな絵本として友人に紹介した。すると、「自己犠牲を美德として、子どもたちから刷り込んでいる」と指摘され、日本で称賛される民話が他文

「AIによる民話の多文化翻訳」は、学習者が創作した民話を、異なる文化的背景を持つバージョンに自動変換し、異文化視点を取り入れる手助けをする。「AIを用いた民話の登場人物の視点変更」では、既存の民話の登場人物の視点を変更し、物語の再解釈を促進することで、多様な価値観を学習者に提示する。「AIによるインタラクティブな民話創作」では、学習者とAIが対話しながら共同で新たな民話を創造し、プロットやキャラクター設定の提案を通じて、創造的思考を深める機会を提供する。

これらはAIを活用した例として示したが、学習者が同じ課題を並行して行い、結果を比較し、それらをもとに学習者間で議論をすることもできるだろう。このように、AI技術は学習者が主体的に民話を再解釈し、新たな物語を創造する過程を補助するツールとして機能し得る。AIを単なる自動生成の手段としてではなく、学習者の創造的な思考を促進する支援ツールとして活用することが重要である。

## 結論と展望

本論文では、民話の再解釈が現代社会の課題にどのように応答できるかを考察し、学習者自身による新たな民話創造の意義を検討した。1960年代以降に修正された民話や、2020年代の多様性を重視した作品事例を通じ、民話が時代の変化に

化圏では異なる評価を受ける可能性があることに気づかされた。これらの経験から、民話の再解釈には異文化的視点を取り入れることが有効だと考えた。

さらに、2021年から2022年にかけてカリフォルニア大学バークレー校に研究員として滞在していた際、AIのデータやアルゴリズムに潜む偏りが社会に与える影響について議論する機会を得た。AIは意思決定の過程で、過去の学習データに基づきジェンダーや人種の偏見を助長することがある(美馬, 2025)。このことから、民話にも固定観念や偏見が内包されている可能性があると考え、再評価の必要性を認識した。一方で、AIを活用して多様性を反映した新たな民話を創造する可能性にも着目するようになった。

適応し、新たな価値を創出する力を持つ可能性を示した。また、教育的観点から、多様性理解を促進する民話の重要性について論じた。

特に、学習者が主体的に民話を再解釈し、現代の価値観に沿った物語を創造することは、思考力・創造力の向上や、多様性を理解する力を育む重要な学びとなる。さらに、AI技術の活用により、異文化視点を取り入れたたり、新たなプロットを生成したりすることが可能となり、学習者の創造プロセスを支援するツールとしての役割が期待される。しかし、AIはあくまで補助的な支援ツールであり、最終的な物語の再解釈と創造の主体は学習者自身であることを忘れてはならない。

本稿は、本ジャーナルが目指す「人や社会と海とのかかわり」を踏まえ、民話を捉えるための視座を提示する予告編として位置付けられる。今後の研究では、海にまつわる民話を中心に、多文化共生や持続可能性に焦点を当てた具体的な教育実践やAI技術の応用方法を検討する予定である。

民話は、過去と未来をつなぐ文化的遺産であり、学習者が主体的に再解釈し、新たな民話を創造することが、教育の場において重要な意義を持つ。本研究が、民話を通じて多様性と包摂性の理解を深める一助となることを期待する。

# 執筆者紹介

※敬称略、五十音順に記載



## 下田元毅

(しもだ もとき)  
広島県広島市  
1980年11月27日  
大手前大学 建築・芸術学部  
建築コース 専任講師  
博士(芸術)  
建築・地域計画, 建築まちづくり  
shimoda@otemae.ac.jp

主に漁村を中心としたアクションリサーチを実施している。近年は、来るべき南海トラフ地震・津波で被災が想定される漁村で、事前に復興計画を考えておく「事前復興計画・まちづくり」に取り組んでいる。



## 久保華誉

(くぼ かよ)  
静岡県富士宮市  
1975年1月2日  
学習院大学、武蔵野大学非常勤講師  
博士(文学)  
口承文芸(昔話)、児童文学、絵本など  
scheherazade1001jp@yahoo.co.jp

元国立国会図書館国際子ども図書館非常勤調査員。単著に「なぜ炭治郎は鬼の死を悼むのか—昔話から読み解く『鬼滅の刃』の謎」(草思社)、「日本における外国昔話の受容と変容—和製グリムの世界」(三弥井書店)



## 西谷榮治

(にしや えいじ)  
北海道利尻郡利尻町  
1954年11月8日  
元利尻町立博物館学芸課長  
利尻麒麟獅子舞う会  
FOM(Friend of MacDonald)会員  
学士(歴史学)  
利尻島近世・近現代史  
matawaka@yahoo.co.jp

現在は個立利尻Dしま博物館を名乗り、島の歴史調査と関係者との交流を継続。鳥取から渡島した麒麟獅子舞の復活伝承と交流、鎖国に密入国したラナルド・マクドナルド調査などに取り組んでいる。



## 小坂典子

(こさか のりこ)  
北海道旭川市  
1989年12月24日  
公益財団法人日本交通公社  
副主任研究員  
修士(観光学)  
持続可能な観光、観光地域づくり  
kosaka@jtb.or.jp

(株)JTB総合研究所、(株)Pioneerworkを経て現職。全国の離島半島地域や山岳地域等での観光地域づくりや事業構築支援に携わってきた。



## 石村 智

(いしむら とも)  
兵庫県伊丹市  
1976年6月22日  
国立文化財機構東京文化財研究所 無形文化遺産部部長  
博士(文学)  
無形文化遺産、考古学  
ishimura-t6y@nich.go.jp

国内外において無形文化遺産の保護に資する研究に従事。また海の文化遺産についても造詣が深く、ミクロナシア連邦ナンマル遺跡の世界遺産登録(2016年)にも携わった。



## 堀 成夫

(ほり しげお)  
山口県萩市  
1971年4月1日  
萩博物館 学芸班 総括研究員  
博士(水産学)  
海洋生物学、貝類学、展示学  
1542@city.hagi.lg.jp

リュウグウノツカイやタカラガイなど萩近海の生物の調査研究のほか、海洋生物をはじめ様々なエキセントリックな生物に関する展示会や、それらを探究する鉄道ツアーなどのプロデュースや実施に取り組む。



## 後藤 明

(ごとう あきら)  
宮城県仙台市  
1954年7月28日  
南山大学人類学研究所  
Ph.D.(in Anthropology)  
人類学  
agoto@nanzan-u.ac.jp

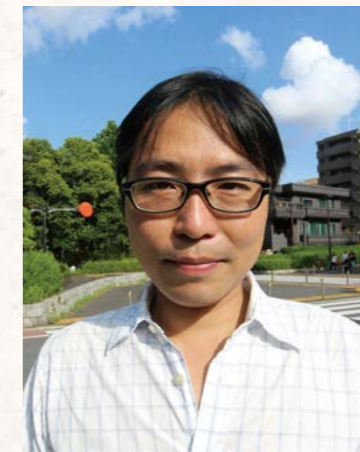
オセアニア・東南アジアの海洋人類学・天文人類学。沖縄美ら島財団や喜界島サンゴ礁科学研究所の学術顧問、沖縄伝承話資料センター理事。エアドーム式プラネタリウムを用いた文化天文学的活動を日本各地で展開中。



## 川島秀一

(かわしま しゅういち)  
宮城県気仙沼市  
1952年12月24日  
東北大学 災害科学国際研究所  
シニア研究員  
博士(文学)  
日本民俗学(漁業民俗、口承文芸)  
shuichi.kawashima.c1@tohoku.ac.jp

漁業や災害も含めた、海と人間の関係についての民俗学的研究を続けている。これまで、日本各地の漁師さん500名くらいから聞き取り調査を実施。現在は、福島県の漁村で漁師の手伝いをしている。



## 飯倉義之

(いいくら よしゆき)  
千葉県  
1975年11月27日  
國學院大學文学部 教授  
博士(文学)  
民俗学: 口承文芸論・現代民俗論  
ekura@kokugakuin.ac.jp

國學院大學で野村純一教授に師事し、口承文芸を学ぶ。民俗社会に伝承されてきた民話と同時に、都市伝説や学校の怪談などの現代の民話、観光や町おこしなどへの民話の利用など、口承文芸の現代的展開も論じる。



## 美馬のゆり

(みま のゆり)  
東京都  
公立はこだて未来大学 教授  
博士(学術)  
学習科学、科学コミュニケーション  
noyuri@fun.ac.jp

大学および科学館の設立計画策定に携わり、設立後は大学教授、科学館副館長を務めた。地域密着型の科学コミュニケーション促進のため、はこだて国際科学祭を毎夏開催。科学技術の学習教材普及のためNPO法人学び足しデザイン工房を運営。



## 佐藤千春

(さとう ちはる)  
岩手県北上市  
1988年1月28日  
一般社団法人  
民俗文化興隆協会 代表理事  
c.sato@jf-trad.jp

日本各地の民謡を調査研究し、地域の歴史や暮らしとの関わりを探究。ラジオやイベント出演、子ども向けワークショップの開催、民謡解説書の発行などを通じ、民謡の魅力を現代に伝える活動を展開している。



## 川村清志

(かわむら きよし)  
奈良県奈良市  
1968年8月14日  
国立歴史民俗博物館  
博士(学術)  
民俗学、文化人類学  
chers.counter.attack0093@gmail.com

参与観察にもとづく長期のフィールドワークを基礎として、能登半島、兵庫県明石市、宮城県沿岸部などの調査研究に従事。地域の祭礼芸能、年中行事などの無形文化と生活用具などの有形文化の統合的な研究を目指す。



## 池ノ上真一

(いけのうえ しんいち)  
大阪府堺市  
1973年11月16日  
北海商科大学 教授  
博士(観光学)  
都市・地域計画、観光まちづくり、地域マネジメント  
ikenoue@hokkai.ac.jp

「技術の人間化」を理念とする芸術工学を学ぶ。竹富島や日本ナショナルトラストで観光を活用した地域づくりに従事し、北海商科大学准教授を経て、現在は北海商科大学教授・日本海洋文化総合研究所代表理事。

## 引用文献 一覧



### 船幽霊が語られるとき

川島秀一

- 柳田国男(1998)「杓子・柄杓及び瓢箪」『史料としての伝説』(『柳田國男全集 14』筑摩書房、704p。

### 海の神話

後藤明

- チェルスキー、ヘレン(2024)「ブルー・マシン：海というエンジンと人類史」、林真(訳)、A&F Books、457p。
- 後藤 明(2000)「『物言う魚』たち：鰻・蛇の南島神話」、小学館、270p。
- 後藤 明(2009)天／海翔けるカヌー：ポリネシア航海民の天空神話。アジア遊学、121、127-137。
- 後藤 明(2010)海人の神話と世界観。「朝倉世界地理講座 15：オセアニア」、熊谷圭知・●片山一道(編)、朝倉書店、51-65。
- 後藤 明(2012)海から来たる王者：記紀神話に見る古代日本の海景観[シースケープ]。「古事記 環太平洋の日本神話」アジア遊学、158、42-54。
- 後藤 明(2017)「世界神話学入門」。講談社現代新書、282p。
- 後藤 明(2024a)民族誌が語る島々の葬儀制と儀礼。「島世界の葬儀制」、小野林太郎(編)、雄山閣、203-222。
- 後藤 明(2024b)オセアニア航海者たちの暦と星座。「神話研究の最前線2」、篠田知和基・丸山顕誠(編)、笠間書房、246-260。
- 後藤 明著(2025)ポリネシア。「星の文化史：世界13地域における星の知識・伝承・信仰」、後藤 明(編)、丸善出版、18-25。
- 大林太良(1993)「海の神話」、講談社学術文庫、219p

### 異郷への誘いー日本の昔話における海ー

久保華誉

- 市古貞次校注(1986)「御伽草子」岩波書店、160-170p。
- 関敬吾(1978)「日本昔話大成 第6巻」角川書店、7-31p。
- 関敬吾(1979)「日本昔話大成 第9巻」角川書店、124-131p。

### 伝統的生態学知識を保存継承する

#### 海の民話とアニメーション化

小坂典子

- Kimmerer, R. W. (2002) Weaving Traditional Ecological Knowledge into Biological Education: A Call to Action. BioScience, 52, 432-438.
- 大村敬一(2002)「伝統的な生態学的知識」という名の神話を超えてー交差点としての民族誌の提言。国立民族学博物館研究報告、27、25-120。
- 海と日本プロジェクト in みやぎ実行委員会(2019)「海ノ民話のまちプロジェクトにおける「海ノ民話のまち」の全国公募申請書」

### 民謡と民話のつながり ー文化を伝える歌と物語ー

佐藤千春

- 浜口一夫・吉沢和夫(1976)「日本の伝説」。角川書店、9、215-220。
- 一般社団法人日本昔ばなし協会(2024)「まりつき唄 | 海ノ民話のまちプロジェクト」。https://uminominwa.jp/animation/54/. 2025年1月20日閲覧
- 松川二郎(1927)「山の民謡・海の民謡」。博文館、340-342。
- 文潮光(1983)「奄美民謡大観(復刻版)」。文秀人、144-146。
- 日本放送協会(1993)「日本民謡大観(沖縄・奄美)奄美諸島篇」。日本放送出版協会、599-602。
- 日本財団海と日本PROJECT・海ノ民話のまちプロジェクト(2024)「海ノ民話の世界」。文藝春秋、4-13。
- 竹内勉(2002)「民謡地図①はいや・おけさと千石船」。本阿弥書店、315-316。
- 竹内勉(2018)「日本民謡辞典II 関東・甲信越・北陸・東海」。朝倉書店、388p。
- 片倉輝男(2014)「奄美民謡島唄集」。南方新社、202-207。

### 高校生たち、地域の民話から学ぶ

飯倉義之

- 株式会社スクールパートナーズ(2024)高校生新聞ONLINE、https://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/11030?page=4、2024年2月13日閲覧。

### 利尻島の歴史を民話に紡ぎ創る

西谷榮治

- 秋葉 実(1988)西蝦夷日誌巻之七～巻之八「武四郎蝦夷地紀行」。北海道出版企画センター、200-201、215。
- 池内 敏(1994)李志恒「漂舟録」について。鳥取大学教養部紀要、28、61-95。
- 池内 敏(1998)第五章 一七世紀、蝦夷地に漂着した朝鮮人「近世日本と朝鮮漂流民」。臨川書店、137-160。
- 更科源蔵・渡辺茂(1952)「北海道の伝説」。柏葉書院、206-207。
- 山本三生(1930)「日本地理大系第十巻北海道・樺太篇」改造社、304p。

### 災害民話がつくり出すまちづくり ～海の民話と地域文脈～

下田元毅

- 広川町日本遺産推進協議会(2018)「百世の安堵」～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～、広川町役場産業建設課。
- 広川町誌編纂委員会(1974)「広川町誌」上下巻、広川町。
- 片柳 勉(2009)地域遺産としての広村堤防の現状と地域社会の意識、Bulletin of geo-environmental science、11、131-138。
- 茗荷 傑(2010)壊滅した村のその後をたどる(新連載・1)濱口梧陵と広村堤防--津波災害から復興した和歌山県広川町。地理、55、64-71。
- 梅田紘子(2011)小泉八雲とtsunami。日欧比較文化研究、15、13-25。

### 民話の再解釈と多様性：

#### 文化的視点を取り入れた物語創造の意義

美馬のゆり

- Bannerman, H. (1899). Grant Richards, London, 57p.
- Disney. (2023) The Little Mermaid. (Live Action).
- 美馬のゆり(2025)AIの社会的影響と教育の転換。名古屋高等教育研究、25、11-24。
- 斎藤隆介・滝平二郎(1969)「花さき山」岩崎書店、3p。
- Woolvin, B. (2020) Bo the Brave. Peachtree Publishing Company, Atlanta, GA, 32p.

海ノ民話学ジャーナル準備号

2025年3月 発行

編集：一般社団法人日本海洋文化総合研究所  
発行：一般社団法人日本昔ばなし協会